

朝は義仲をも殺さうとしたが、實盛之を憐み、ひそかに知人の木曾にゐる中原兼遠の許へ逃してやつた。兼遠は義仲を愛撫して育て、自分の娘巴を妻にやつた。實盛は義朝が尾張の長田忠致に殺されてから、節を屈して平家に降り、宗盛から重用されて軍監になつたが富士川の戦には脆くも負けるし、頼朝の勢が盛になるに従ひ、懊惱として死所を選んで居たらしい。そこで此度維盛が木曾を討伐する軍に従ひ、鍬形の冑や錦の直垂を着て、加賀の篠原で討死したのである。義仲から見ると、實盛は命の恩人であるから、樋口に首を洗はせて、始めて實盛だといふ事が分つた時は、どんなに驚き歎いた事であらう。手塚ノ太郎に討たれる時、名乗れと言つても名乗らず、木曾殿が知つて居ようと言つて討たれた氣持、或は若者共に侮られまいとして、白髪を染めて出陣した武者振など、考へると實に悲壯を極めたものであつた。かゝる史實を知つて此の句を味へば、芭蕉が上五にむざんやなと置いた心持もしみじみする。單なる古典の引用ではない。

菜 畠 や 二葉たはの 中はの 蟲 の 聲 尚 白

【語意】 二葉—草の芽生の二枚葉。

【句意】 菜がやうやく一二寸伸びた位の畠の中から蟲が鳴いてゐるといふ意。

【鑑賞】 清新な鋭い感覺の表れた句でよい。

は た お り や 壁 に 來 て 鳴 く 夜 は 月 よ 風 麥

【語意】 はたおり—キリギリス。月よ—月夜。

【句意】 キリギリスが壁へ來て鳴いてゐる。外は月夜で、月光が草葉の上に白く流れてゐる光景。

【鑑賞】 實景を平明に言つただけであるが、夜は月夜と重ねて言つた表現が、軽く調子付いて面白い。

いせにまうでける時

葉月や矢橋に渡る人とめん 亡人 千子

【語意】 いせにまうでける時―貞享三年秋、千子は兄去來と共に參宮し、伊勢紀行を書いた。矢橋―勢田の北一里にある。湖水に面し、大津松本へ渡航一里の渡しである（京から行けば、大津松本の渡しを利用して矢橋へ出る）。陸路勢田の橋を渡つて行くと、大津迄二里を要するので、渡船を利用したのであるが、二月・八月などはとかく湖水が荒れるので、難船する事が多い。古歌に、「ものゝふの矢橋のわたし近くともいそがばまはれ瀬田の長橋」ともある。

【句意】 八月は湖が荒れて、とかく難船するやうだから、矢橋の渡しにかかる人はとめたものであるとの意。

【鑑賞】 伊勢參宮の折であるから、大津松本の渡船を利用して、矢橋へ出ようとする旅人

に注意したのだらう。婦人のやさしい氣持が出てゐるだけの句。

三ヶ月に鯨のあたまをかくしけり 之道

【語意】 鯨―鱈。鮫科に屬する魚で、大き二三丈に至る。體灰黒色、凶惡の魚で、船を覆し、人を食ふ。

【句意】 波の上を三日月が淋しく照してゐると、そのほの暗い海面に、鱈がポカツと頭を出したかと思ふと、急に又海中に没して了ふ光景。

【鑑賞】 凄絶な夜の海の有様を巧に描いてゐるが、何となく凄い場面を作り設けた句のやうにも見える。

粟稗と目出度くなりぬはつ月よ 半 殘

【語意】粟―瘦地に成長し、早に堪へ、長く貯へる事の出来る穀物。稗―之も粟の如く禾本科の草本で、穂は粟より小さいが、瘦地に成長し、種子は食用になる。初月夜―八月四五日頃の月。

【句意】粟も稗も十分に實つて、初月がゆたかに田野を照す。自分には何の不足もない。粟も食へるし、稗も食へる、目出度い秋であるとの意。

【鑑賞】俳人の簡素な生活が遺憾なく表れてゐる。粟や稗を食つて、秋をたのしむ氣持がよい。

月 見 せ ん 伏 見 の 城 の 捨 郭 去 來

【語意】伏見の城―文祿三年秀吉の造つた城であるが、後家康之に住み、越後の上杉景勝を征伐する時、家臣鳥居元忠に守らせたが、元忠石田黨に攻められ、城陥り自殺した。捨郭―荒廢した城の石圍ひ。

【句意】廢墟になつた伏見の城に上つて、元忠の忠勇義烈の死を悼みながら、月を見ようといふ意。

【鑑賞】懐古的な感情を述べただけの句。

翁を茅舎に宿して

を も し ろ ろ 松 笠 も え よ 薄 月 夜 伊 賀 士 芳

【語意】翁―芭蕉。茅舎―アバラヤ。松笠―松の實。松ふぐり。奥の細道松島の條下に、落穂松笠など打ちけふりたる草の庵閑に住みなし、いかなる人とはしられずながら、先づなつかしく立ち寄るほどに、云々」とあるから、松笠の火は芭蕉の好んだものと見える。

【句意】松笠よ。面白く燃えてくれ。先生の好まれる松笠の火である。外には月が淡くさしてゐる。静かな夜だ。貧しい住居ではあるが、何の變つた持成しも出来ないが、せめて

松笠の火に顔を照らし合つて、一夜をしみくと語りたものであるといふ意。

【鑑賞】 簡素な、佗びつくした氣持の、よく表れてゐる句である。師弟の交情の濃厚な有様が好ましい。茶をわかすために、松笠をもやしたのか、酒を暖めるためか、或は物を煮るためか、圍爐裡がどこにあるか、圍爐裡ではなく、へつついか、それも土間にあるか、庭先にあるのか、などといふせんさくは問題ではない。ただ師の好まれる松笠をもやして靜に物語るといふ事が、此の句の中心生命である。

加茂に詣づ。しでに涙のかゝる哉と、かの上人のたなこのやしろの神垣に取りつけてよみしとや。

月影 や 拍手 も る 上 史 邦

【語意】 加茂に詣づ—京都加茂神社に參詣する。加茂の社は下加茂と上加茂とにある。下

加茂は玉依姫を祭り、上加茂は別雷ノ神を祭る。して—四手。注連繩又は玉串などに垂らす紙。昔は木綿を用ひる。たなこ—棚尾の俗訛。上加茂にある。上加茂に藤尾・山尾・はじ尾・杉尾などの末社があるが、その内の一つであらう。前書文意、加茂の御社に參詣する。四手に涙がかかるわいと、かの西行上人が神垣に取付いて詠んだとかいふ事である。大鏡に護物説として撰集抄の文を引用してゐるが、それは玉葉集に、「そのかみ仕うまつりなれける習に、世を遁れて後も、賀茂の社に參りけるを、年たかくなりて、四國のかたへ修行しけるが、又かへり參らぬこともやとて、仁安三年十月十日夜參りて、幣まゐらすとて、棚尾の社のもとにて、靜に法施奉りける程、木の間の月ほのくにて、常よりも神さび、あはれに覺え侍りければ、西行法師、かしこまる四手に涙のかかるかなまたいつかはと思ふあはれに。」とあつて、撰集抄ではない。

【句意】 社殿の前にぬかづいて、拍手を打つてゐると、月影が拍手を洩れて、膝の上に落ちるといふ意。

【鑑賞】 清寂な敬虔な氣持はうかがはれるが、想はむしろ平凡である。

友達の六條にかみそりいただくとてもまかりけるに

影ほふしたぶさ見送る朝月夜

伊賀
卓袋

【語意】 六條にかみそりいただく―東西兩本願寺は下京六條にあるから、六條と言つて本願寺をさす。大鏡に、「六條に剃刀いただくは、敢て髪剃り落すにもあらずして、門主の手づから剃刀取りてあて給ふばかりなり。云々」とある。たぶさ―髻。頭髪を頭の後に束ねたもの。朝月夜―明方の月夜。前書文意、友達が六條の本願寺へ剃髮式をあげに行くと言つて出かけたのに送る。

【句意】 友人の影法師が有明月に淡く照らされて地上に映る。勿論髻の影も地上にあるがこの髻も今日から剃り落されて了うかと思ふと、友の姿が佗しく見えるといふ意。

【鑑賞】 髻、見送ると言つた表現がしみじみさせる。佛門に歸依する友の清淨な心、その姿

を有明月の中に見出す心持が、此七字の字中に活躍してゐる。

はせを葉や打ちかへし行く月の影

乙 効

【句意】 芭蕉葉に月がさして、月の動くに従ひ、今迄月に照らされてゐた部分が陰になり月の照らなかつた部分が表面に表れるといふ細かな光景を言つたもの。

【鑑賞】 打かへし行くが巧な表現である。平凡な事柄ではあるが、打かへし行くと言つたので、時間的に情景を變化させる。

京 筑紫 去年の月とふ僧仲間 丈 艸

【句意】 京の僧と筑紫の僧とが或所に會合して、去年の名月の話を面白く語り合つたといふ意。

【鑑賞】 京の僧、筑紫の僧、各生國を異にした僧であるから、話も變化がある。而も京僧筑紫僧が仲間同志で去年の月の話をしたのだからなほ更面白い。勿論風雅な僧であらう。そこに複雑した談話の内容が想像されて情趣を深かめる。僧仲間といふ言葉も親しみがあつて、蚊屋一張に五人こぞり臥したれば、夜もいねがたくて、夜半過よりも各起出でて、晝の菓子盆など取出して、曉近きまではなし明す。去年の夏凡兆が宅に臥したるに、二疊の蚊屋に四ヶ國の人ふしたり。思ふ事四にして、夢も四種と書き捨てたる事どもなど言ひ出して笑ひぬ。云々」とあるが、かゝる境遇に一寸似てゐよう。かうした親しい自適な生活が元祿俳人の詩の世界であつた。

吹く風の相手や空に月一つ 凡兆

【句意】 晴れ渡つた夜、寒い風が吹き荒んで、地上何物もその相手になるものは無い。た

だ大空の月一つが、風の相手になつてゐる。

【鑑賞】 廣い原野のすさまじい月を想像させるけれど、想の幼稚な句だ。

ふりかねてこよひになりぬ月の雨 尙白

【句意】 中秋無月と言はれてゐるから心配してゐる。どうも此の頃の空工合は危い。併し降りさうで降らない。この分なら翌の晩は大丈夫だらう。そろ／＼月見の仕度にとりかからうとしてゐると、午後から降り出して来て、がっかりしたといふ意。

【鑑賞】 月見の人のいら／＼した期待感情は表れて居ない事もないが、表現が生温つこいし、散文的であるから、さうした感情は強く出てゐない。

向の能き宿も月見る契かな 曾良

【語意】 向の能き宿一月を眺めるに都合のよい宿。

【句意】 月を眺めるに都合よく出来てゐる家に來合はせて、月見する事も、何か前世からの約束であるかなあといふ意。

【鑑賞】 月見る契と言つた所が、情味を深める表現である。

元祿二年つるがの湊に月を見て、氣比の明神に詣で、遊行上人の古例をきく。

月 清 し 遊 行 の も て る 芭 蕉

【語意】 氣比の明神—ケヒノミヤウジン。官幣大社。氣比神宮といふ。御食津神、伊奢沙別ノ命を祭る。仲哀天皇の御魂を祭る社と言はれ、殊に崇敬される。遊行の持てる砂—奥ノ細道八月十四日の條下に、「けひの明神に夜參す。仲哀天皇の御廟也。社頭神さびて、松

の木の間にもり入りたる、おまへの白砂霜を敷けるがごとし。往昔遊行二世の上人、大願發起の事ありて、みづから草を刈り、土石を荷ひ、泥濘をかかわせて、參詣往來の煩なし。古例今にたえず。神前に眞砂を荷ひ給ふ。これを遊行の持砂と申し侍ると、亭主かたりける。」とある。遊行宗は時宗と言ひ、一遍上人を開祖とする。一遍諸國を遊行し、決定往生の札を諸人に與へたとある。本山は相州藤澤にあつて、藤澤山清淨光寺といふ。代々の住持一遍の例に倣ひ、諸國を廻遊して、念佛行法をすゝめる。奥ノ細道に記す如く、砂持は二世他阿上人より始まり、之も歴代の上人一代に一度砂持の行事を行ふ習慣になつてゐる。前書文意、元祿二年越前敦賀の湊に月見して、氣比ノ明神に參詣し、遊行上人の砂持の古例を聞いた。

【句意】 夜月明に乗じて、氣比ノ明神に參詣すると、社頭神さび、松の木の間から月が洩れて、社前の白砂霜を敷ける如く、そゞろに遊行上人の砂持が思ひ出され、その高德に感じて、敬虔な心になつたといふ意。

【鑑賞】 遊行の持砂を偲んだ事が、此句の中心價值で、それを除いては平凡な句である。

仲床の望、猶子を送葬して

かかる夜の月も見にけり野邊送 去來

【語意】 仲床の望—八月十五夜。猶子—甥。

【句意】 甥の野邊送りをするやうな悲しい夜に、十五夜の月を見ようとは思ひがけぬ事である。今夜の月見はいつものやうに楽しいものではないとの意。

【鑑賞】 かゝる夜の月と言つた表現が、切實な感情を強めてゐる。月ものもが哀感を深かめてゐる。

明月や處は寺の茶の木ばら 膳所 昌房

【語意】 明月—八月十五夜の月。許六の篇突に、「名の字に、近代明の字書く人あり。覺

東なし。」とある。

【句意】 寺の側の茶の木晶で、お月見をしたといふ意。

【鑑賞】 明月やと置いて、處は寺の云々と言つた表現が、キビキビして面白い。想よりも表現に強みと新しみを持つた句。

月見れば人の砧にいそがはし 羽紅

【句意】 月を見てみると、方々の家で砧を打つてる。その砧の音がいちいち氣にかかつて忙しい惱ましい氣持になるとの意。

【鑑賞】 古來砧の音に、例へば旅に居る良人を想ふとか、我子を案ずるとかいふ思慕の情を寄せた詩歌が多かつた。作者も其の例に倣つて、月を見ると方々の砧が何のために打たれるのであるかと、氣が忙しくなつて、惱しい思がすると言つたのであらう。月を見る哀

情を、砧の音によつて、一層深かめようとした句である。

僧正のいもとの小屋のきぬたかな 尚白

【語意】 砧—衣を搥つための木の臺。僧正の妹—僧正は僧官の一位。大鏡に、「一書に云、彼の花山僧正の、うつぶしぞめのと詠みて送り給ひけむ、小屋の礎と聞えたり。」とあるが花山僧正の女は妹ではなく、戀人であるから、此の句の砧には當らない。花山僧正とは僧正遍照の事で、花山院に居たから、かく呼ばれたのである。大和物語によると、僧正遍照が未だ良岑ノ宗貞と言つて居つた時、ひそかに契つた女があつた。その女は五條邊の荒れた檜皮屋ひはだやに住んで居つた。後出家してから、その女の事を思ひ出して、女の許へ袈裟を洗ひにやると言つて、「霜雪の降る家が下にひとりねのうつぶしぞめのあさの袈裟なり」といふ歌を贈つたといふ説話がある。僧の妹には源信僧都の妹や宇治十帖の横河の僧都の妹などがあるが、此の句の出典としては無關係のやうに思はれる。或は作者は花山僧正の女

を妹に置き換えて、砧を打たせたものかとも考へる。何となく故事により所のありさうな句であるから、解釋に骨が折れる。

【句意】 或僧正に妹があつた。兄は時めく生活をしてゐるが、妹は片田舎に引込んで、思ふ人もなく、或はあつても今はかれ／＼になつたといふやうなみじめな生活をしてゐる。その女が佗しく砧を搥つてゐるといふ意か。

【鑑賞】 古典趣味の句で、砧搥つ事によつて、女の哀れな境遇を示さうとし、殊にその女が僧正の妹であるので、種々の情趣を想像させる。

初潮や鳴門の浪の飛脚舟 九兆

【語意】 初潮—八月十五日の大汐。鳴門—阿波の鳴門。阿波と淡路の海峡。常に海水渦巻き、航海の難所である。飛脚船—飛脚の便に用ひる船。一定の時日を置いて出帆する。

【句意】 阿波の鳴門を通過する飛脚船の、矢よりも早く走り行く光景である。殊にそれが

一年中の大汐の時であるから、潮満ち、渦巻き物凄く、一葉の偏舟が今にも捲き込まれさうに見える危き場面である。

【鑑賞】 豪壯な叙景句である。飛脚船であるから、普通の船より速からうし、大汐の鳴門を乗切る事は、手に汗を握らせる思であらう。句法の緊密した客観表現、九兆の獨壇場である。

一戸^{いちど}や衣もやぶるゝこまむかへ 去 來

【語意】 一戸―陸奥一ノ戸町。馬の産地。こまむかへ―駒迎。朝廷に奉る馬を、左右馬寮の役人が、逢坂山まで請取に行く事。昔は八月十五日であつたが、朱雀天皇の御國忌に當るので、近代は十六日になつた。諸國の牧から馬を引いて来る日は大體定まつてゐた。例へば十七日は甲斐ノ國穗坂の馬牽、二十日は武藏ノ國小野の馬牽、二十三日は信濃の國望月の馬牽、二十八日は上野の馬牽などであつたが、後には望月の牧のみとなり、それもや

がて絶えた。大鏡に、「長明四季物語に、みちのくの駒迎へ二十三日をいふ。」とある。

【句意】 二百里も遠い一ノ戸から馬を牽いて来るのだから、馬方も衣は破れ、顔はやつれ見るからに氣の毒な様子であるといふ意。

【鑑賞】 懐古的な感情を示したのだが、作者の心にはよくも遠くから名馬を選んで牽いて来たものだ、馬も盗まれず、自分達も病氣にかからず、注意に注意を重ねて連れて来た事は感謝に堪へないといふやうな、勞苦をねぎらう情があつたのであらう。そこが此の句の價值である。

稗の穗の馬逃したる氣色哉 越人

【句意】 稗畠の馬が逃げ出した。それは稗の穗が風にざわついて、馬の耳を驚かしたからである。附近の百姓は馬が逃げたあとを騒いでゐる。現場へ行つて見ると。相變らず稗の穗は風にざわついてゐるといふ意。

【鑑賞】 巧な句である。稗の穂がざわ付いて馬を逃がしたやうに表した所がよい。馬は物に驚き易い性であるから、稗の穂がやかましく鳴れば、驚いて逃げるだらう。稗畠であるから荒地である。淋しい原野である。馬の逃げた後の稗は、依然として風にザワザワ穂を鳴らしてゐる。

澁糟 やからすも喰はず 荒畠 正秀

【語意】 澁糟―柿の澁を搾り取つた残の糟。

【句意】 荒れた畠に柿の木がある。柿の實も大方もがれて、澁に搾られて了つた。搾り残の糟は畠に捨てられてある。鳥が来て、柿の實を突かうとしても柿がない。澁糟では食はうにも食へない。淋しさうに畠の周をうろついてゐるといふ意。

【鑑賞】 荒畠の佗しい光景はよく出てゐる。鳥も食はずと言つた表現が、一層澁糟を捨てた畠の荒涼たる状態を如實に表してゐる。

あやまりてぎぎうおさゆる 鱚哉 嵐 蘭

【語意】 ぎぎう―谷川に棲む魚。頭扁く、體茶褐色、黒斑がある。鱗骨硬く鋭く、之に刺されると痛かひどい。鱚―はぜに似た小魚。頭口大きく、體淡黒色。谷川の石の間に棲む。

【句意】 谷川へ鱚を捕りに行つて、誤つてぎぎうを押へて刺され、辛い目に逢つたといふ意。

【鑑賞】 石の下に手を入れて、鱚を捕らうとして、ぎぎうに刺された、滑稽な動作を表しただけ。

物の音ひとりたふるゝ 案山子哉 九 兆

一鳥不鳴山更幽 案山子哉 九 兆

【語意】 一鳥不鳴云々―王荆公の鐘山即事の詩句である。即ち澗水無聲繞竹流、竹西花草弄春柔、茅簷相對坐終日、一鳥不鳴山更幽。何丸の小鏡に、「結句の一句を奪ひ取りて秋の句の端書にしたるなり。是詩題にはあらず。詩の一句を端書にして、案山子の句の光を添ふるなり。……詩題は詩の意をありのまゝにいひ込むなり。和歌の置題と同じ。詩の端書は外の端書の如くにして、一句に光を添ふるなりと知るべし。云々」とある。

【句意】 山田の稻を刈り取つて見ると、稻のある時は鳥もやつて來たが、今は一羽の鳥さへ來鳴かない。案山子も用がないから、倒れるに任せてある。物の音としては、案山子がひとりでに倒れる音だけであるとの意。

【鑑賞】 寂寞たる山野の情景はよく出てゐる。物の音と音の印象を上五に持つて來た所が面白い。

むづかしき拍子も見えず里神樂 曾良

【語意】 里神樂―禁裏以外の神樂。近世町村の祭に行はれる二十五座のやうな神樂。神樂は普通十一月の季題であるが、こゝでは秋祭の神樂であらう。むづかしき―煩はしい。面倒な。拍子―笛や太鼓の節工合。

【句意】 里神樂は、古代から傳はる神樂のやうに、面倒な氣の詰まるやうな拍子でないから面白いといふ意。

【鑑賞】 里神樂の滑稽な氣輕い狀を言つたものであるが、句法もたるんでゐるし、事柄も平凡である。

旅枕鹿のつき合ふ軒の下 江戸千里

【句意】 宿屋に泊つて、旅の勞を休めてゐると、夜など鹿が軒下へ來て、角を突き合はしてゐるとの意。

【鑑賞】 田舎の宿屋の佗しい状はよく出てゐる。旅枕だからなほ面白い。

鳩 ふくく や 澁柿 原の 蕎麥 畠 珍 碩

【語意】 鳩ふくく—鳩を捕る時、掌を合せ吹いて、鳩の鳴聲を眞似る事。又鹿狩の獵師が鹿を見付けた時、鳩の聲を眞似て、仲間に合圖する事、或は鷹を捕る時、鳩の聲を眞似て誘ふなどの事もいふが、こゝでは鳩を捕る擬聲である。

【句意】 澁柿畠の一方が蕎麥畠で、そこに百姓が鳩の聲を眞似て、鳩を捕らうとしてゐる状である。

【鑑賞】 蕎麥は瘦地に生へるもので、澁柿畠も下は柿の落葉に埋れて荒れてゐる。その情景が何となく鳩吹き佗しさうな姿と調和してゐて面白い。

上 行 くと 下 くる 雲 や 穰あきの 天あめ 九 兆

【語意】 穰—秋。

【句意】 上の方を向うへ行く雲もあれば、下の方をこちらへ流れる雲もあるといふ秋晴の好日和。

【鑑賞】 秋晴の空の爽かな朗かな氣持がよく出てゐる。平淡だがよい句だ。

鮎せいで 釣 る 頃 も 有 る ら し 鱸すずき つ り 半 殘

【語意】 鮎—スズキの幼魚。頃—原本比とあれど、頃に直す。鱸—體橢圓形、側扁。口巨く、鱗細かい。背淡蒼色、腹淡白色。長さ二尺位。冬河より海に入り、夏海より河に上る。

【句意】 今は鱸を釣つてゐるが、鮎を釣る頃もあらうといふ意。

【鑑賞】 スズキは夏河へ上つて子を産むのであるから、その子が少し大きくなつて、セイゴとなる時には、セイゴを釣る時であらうといふ、單純な暢氣な想像が面白いのだらうか。

すずき釣の心理か。

【句意】 かなか間のうすべり寒し菊の宿 尙 白

【語意】 かなか間―座敷の廣さの尺度。大鏡に、「田舎間は五尺八寸、疊の厚さ一寸六分、京間は六尺三寸、厚さ一寸七分。三公・門跡方六尺六寸、厚さ一寸八分。是を高野間ともいふ。吉野にても用ふるとなり。禁中、七尺、厚さ二寸。各横は豎の半なり。」とある。うすべり―縁の附いてゐる座。菊の宿―菊を作る家。

【句意】 菊を作る人の家が、田舎間で狭くうすべりもよこれ、道具も煤けてゐたので、寒く佻しいと言つたのである。

【鑑賞】 菊作りの貧しい生活を示したのである。菊は隱逸の花であるから、菊を作る人の住居も佻しく感ぜられよう。

菊を切る跡まばらにもなかりけり 其 角

【語意】 まばら―不揃。長短のある事。

【句意】 菊畠の菊であらう。直立した一莖一花の菊が大切に培はれてゐる。黄白とりぐな見事な咲きぶりである。その菊も末になつたので、切り取つたが、切つた跡も自然と揃つてゐたといふ意。

【鑑賞】 調は雄健であるが、想は少し理窟臭い所があるやうだ。大切に培つて、立派に咲かせた花であるから、切るにも自然と大切に取扱はれたといふ氣持が含まれて居りはしまいか。

高土手に鶺鴒の鳴く日や雲ちぎれ 珍 碩

【語意】 鶺鴒―雀より小さい鳥で、全身黄青色、好んで稗を食べる。

【句意】 一面の田野、見渡す向ふに高い土手がつづく。その土手の樹にヒハが止つて鳴いてゐる。空はよく晴れ、ちぎれ雲が土手の上に浮ぶ。絶好な秋日和。

【鑑賞】 朗かな秋晴の光景はよく出てゐる。平易にして一流の句。

この頃のおもはるゝ哉 稲の秋 土 芳

【語意】 稲の秋―稲のよく實る時分。

【句意】 稲がよく實つたので、稲を取入れる時の忙しさが思ひやられるといふ意。即ち稲を刈る者もあれば、刈り取つた稲を車に積んで運ぶ者、稲木にかける者、稲を抜く者、唐箕にかける者、その忙しい様が目前にちらつくといふ意である。

【鑑賞】 思はるゝ哉と中七に言ひ切つた所に、稲を取入れる農家の忙しさが強く示されてはゐるが、事柄は平凡な句である。

稲 かつぐ 母に 出迎ふ うなゐ 哉 九 兆

【語意】 うなゐ―幼童。

【句意】 稲をかついで歸つて来る母を、途中迄子供が出迎に行くといふ意。

【鑑賞】 豊作の賑さを一家して喜ぶ状は見えるけれど、興趣に幼稚な感がある。

自題ニ落柿舎

柿ぬしや 梢ほちかきあらし山 去 來

【語意】 落柿舎―風俗文選卷之五に、落柿舎ノ記がある。それによると、去來は嵯峨に一家を持つて居つた。附近に柿の木が四十本あつたけれど、番人が五六年経つても、柿も持つて來なければ、實を賣つたといふ話も聞かない。そこで或時行つて見ると、丁度京か

ら商人が来て、立木のまゝ柿を一貫文で買はうといふので賣つてやつた。するとその晩大風が吹いて、柿の實がみんな落ちて、梢は空になつてしまつた。翌朝商人がやつて来て、梢をつくづくと眺め、自分は子供の時から、此の商買をしてゐるが、こんなに落ちる柿を見た事がない。金を返してくれといふので、仕方なく返してやつた。此の男の歸つたあとで、友達の許へ手紙をやつて、自ら落柿舎の去來と書いたとあつて此の句を出す。

【句意】 柿林の主人となつた自分の家の周囲の景色を叙べたのである。

【鑑賞】 作者には草庵が忘れがたき思出のものであつたらうが、叙事は平凡な句である。一晚中に柿がみんな落ちて了つたといふエピソードの方が面白い。

し　ら　浪　や　ゆ　ら　つ　く　橋　の　下　紅　葉
賀　劭　小　松
塵　生

【句意】 溪流があつて、簡単な橋が架つてゐる。橋の下の兩岸には、雑木が水に覆ひかぶさつて紅葉してゐる。その橋は歩くとゆらくして危険を感じる。下の谷の水は岩に激し

くぶつかつて白浪を立てゝゐる。見るから恐しい氣がするといふ意。

【鑑賞】 斷崖に架つてゐる橋や周囲の風物が、ありのままに敘せられて、一擲の趣はあるが、敘法は平凡である。

肌　さ　む　し　竹　切　る　山　の　う　す　紅　葉
九　心　兆

【語意】 竹切る―竹を切るのは八月である。竹を切ると蟲が付かない。

【句意】 附近の百姓が、竹山に入つて、竹を切り透かしてゐる。竹山には雑木が生へて、それがうすく紅葉してゐる。その光景が肌寒く感ぜられるといふ意。

【鑑賞】 清新な冷々した秋の竹山の感はよく出てゐる。肌寒しといふ主觀が竹山によく利いてゐる。

さればこそひなの拍子のあなる哉神田祭の鼓うつ音 蚊足
拍子さへあづまなりとや。

花すゝき 大名衆をまつり哉 嵐雪

【語意】 神田祭—神田明神の祭。九月十五日。後隔年となる。祭神大己貴^{おほなむち}ノ命。麴町山王祭と共に、東都の二大祭禮である。神事能がある。さればこそ云々—案の定神田祭の太鼓の音には田舎びた調子があるわい。伊勢物語十三條に、昔男が陸奥へ下つた所、その女が京の人を珍しく思つて想を寄せ、「なかなか戀に死なずば桑子にぞなるべかりける玉の縁ばかり」といふ歌を作つたとある末に、「歌さへぞひなびたりける。」といふ句があつた。その詞による。拍子さへ云々—太鼓の調子さへ、東國の田舎臭さがあるといふのか。之は蚊足の和歌に反問した詞で、蚊足は神田祭の太鼓の音が、田舎びてゐると言つたが、神田祭の景氣は豪氣なものであるぞといふ意味が含まれてゐる。花すゝき—穗に出た芒。

【句意】 神田明神の祭には、大名衆から警固の役人が出て、皆槍や棒を立て、取締る有様が、恰も花芒のやうに美しく見えるといふ意。

【鑑賞】 警固の役人の出立を、花芒に喩へた所がわるい。そこに作者の俗悪な浮華な一面が窺はれる。元祿の末頃江戸に洒落俳諧といふ一風が行はれたが、此の句も其の類の句に近い。

行く 秋の 四 五日 弱る すゝき 哉 丈 艸

【語意】 行く秋—秋の終。九月盡。

【句意】 秋が去つて、四日経ち、五日経つ中に、芒が目立つ位弱つて来たといふ意。

【鑑賞】 芒は秋の野の淋しさを、最後迄色付けるものであるから、それがだんだん弱つて来たといふと、一層行く秋の悲しさ淋しさを痛感させる。

立ち出づる 秋の夕や風ほろし 九 兆

【語意】 風ほろし―風疹。皮膚の上に出る粟粒のやうな發疹で、風邪を引いた時によく出来る。風邪をひくと胃腸が悪くなるから出るのだらう。

【句意】 風ほろしにかかった人が、秋の夕方外を歩いてゐる佻しい姿を言つたもの。

【鑑賞】 病人の淋しい印象はよく出てゐる。風に吹かれて、咳をしながら、とぼくと道行く人の姿がありくと目にうつる。

世の中は 鶴鶴の尾のひまもなし 同

【語意】 鶴鶴―水邊に棲む鳥。燕に似て青灰色。頸の下に黒い條がある。尾長く、絶えず上下に動かす。

【句意】 世の忙しい營を、セキレイが尾をたえず動かしてゐる狀に喩へたもの。

【鑑賞】 觀念的な句であるが、人生をセキレイに喩へた所が陳套を脱し、理窟を離れてゐる。かかる觀照態度に何となく俳諧的な飄逸味がある。

鹽魚の齒にはさかふや 秋の暮 荷 兮

【語意】 はさかふ―はさまる。秋の暮―篇突に、「秋の暮は古來秋の夕間暮といふ事にて、中秋の部には入りたり。」とある。併しこゝでは暮秋といふ意味に扱つたのであらう。

【句意】 夕食に鹽漬の魚を食べて、其の肉か骨が齒にはさまつて困つた。もう秋も末になつたといふ意。

【鑑賞】 老境に入つた自分の衰へを、淋しく晩秋の風物につけて痛感する狀である。

猿蓑集卷之四

春

梅 咲いて 人の 怒の 悔も あり 露 沾

【句意】 梅の花は清い氣高い句のするものであるから、梅の花を見ると、自然と教訓されて、人を怒つたあさましさが後悔されるといふ意。

【鑑賞】 梅の花は清淨・潔白なものであるから、古來梅の花を少婦の貞淑にたとへた詩歌が多い。それが歌人の通念であつた。作者もそれに倣つて、自己反省の觀念的感情を述べてゐる。その表し方は新しくもないが、内省に落付きのある所が、此の人の氣品であらう。

上藹の山莊にましくけるに候し奉りて

梅が香や山路獵入ル犬のまね 去來

【語意】 上藹—位貴き人。標注に、「上藹ハ菊亭殿ナランカ。去來ハ其家ニ仕ヘシ人也。」とある。山莊—山中の別莊。前書文意、上藹が居られる山莊に伺候して。

【句意】 自分は山路を獵り分けて入る獵犬のやうな眞似をして、馥郁たる梅花の山莊へ赴くといふ意。

【鑑賞】 梅花の香を慕ひながら、木や草をくぐり分けて、山莊に行く狀を獵犬にたとへたのであるが、その喩へ方が卑俗であり、詔ふやうに感ぜられる。宗鑑が犬筑波集と題したのと同じやうな卑下な心があつて、たとへ方も古いし、かういふ氣持を俳諧と考へる事も時代後であらう。いやな句である。

むめが香や分入る里は牛の角加賀句空

【語意】むめが香—うめが香。

【句意】梅が香を慕つて、牛に乗つて里に分入るといふ意。牛の角と言つたのは、牛が首をふるから、角が里を分けて入るやうに見えるからであらう。

【鑑賞】牡丹花宵柏は常に牛に騎つて歩いたと言はれるし、又眞山民の詩にも知騎牛樂といふやうな句もあつて、とかく牛に騎つて梅を尋ねるといふ事は、風流人の行爲のやうに見做されてゐるから、事柄としては此の句は古臭い感がしよう。

庭興

梅が香や砂利しき流す谷の奥 土芳

【語意】庭興—庭前の即興。

【句意】山莊の即景である。庭前に谷川があつて、細かい玉砂利が敷き流されてゐる。谷の奥には梅林があつて、香しい匂が通つてくるといふ意。

【鑑賞】清閑な山莊の光景がよく表れてゐる。梅が香がその幽邃な状態を偲ばせる。

はつ蝶や骨なき身にも梅の花 半残

【語意】はつ蝶—初蝶。春の初に出る蝶。骨なき身—まだ毛蟲から蝶になつたばかりの體であるから、翅もヘナヘナしてよく飛べない。その状態を骨の無い體と想像したのであらう。家隆の歌に、「尋ね來るはかなき羽にも匂ふらん軒端の梅の花の初てふ」とあるに據つたものか。

【句意】初蝶が骨の無いやうな體をして、危げに梅の花に慕ひ寄るといふ意。

【鑑賞】 はかなげな初蝶の、梅の花に寄り来る可憐な情景はよく出てゐる。併し骨なき身といふ詞は、少し荒い露骨な見立のやうな氣もする。

梅が香や酒のかよひのあたらしき 膳所 蟬 鼠

【句意】 正月になつたので、酒屋の通帳も新しく出来て、臺所の柱にかかつてゐる。どこからか梅の花が芳しく匂つてくるといふ意。

【鑑賞】 梅の香と酒屋の帳面との取合であるが、美濃派の句に見るやうな浅い情味と思ふ。

の奥にむめ の木や此一筋を 落のたう 其角

【語意】 落のたう―落の臺。春落の花莖より生ずるうす青い苞やうのもの。味舌く、食用にする。路通の勸進牒に依ると、露沾公亭に於ける正月廿九日の月次興行、通題梅とある

中の句で、「饗應に侍る由。その日はことに長閑にて、蘭中に芳艸をふみ、入口面白かりけるよし。うらやましさに追うて加はり侍る。」と前書がある。其角は列席しなかつたものと見える。

【句意】 庭中の徑を行くと、奥の方に梅林があつて、こゝから一直線に道が付いてゐる。その道の兩側に落の臺がうす青い頭を出して生へてゐるといふ意。

【鑑賞】 五元集に梅がかやとある。併し梅が香やでは全體の感が散漫になる。これは梅の木の方がよい。落の臺に中心を置いて味ふべき句である。此一筋をと言つた詞は、其角の例の人威しの表現ではあるが、新味はある。それに句法も引締つてゐてよい。

こらたち 子良館の後に梅有りといへば

御子良子の一もと床し梅の花 芭蕉

【語意】 子良館—伊勢太神宮の神饌に奉仕する少女の住居。御子良子は俗にオハラコといふ。大鏡成美引用の坂土佛の太神宮參詣ノ記に、「子良とて幼稚の乙女の、いまだ夫婦のわざもしらぬが、御膳を備ふる器用にて、召仕はるゝばかりなり。神慮に叶ひぬれば、二十三日までも月事なし。冥靈にそむきぬれば、十二日にもさはる。さはれば即ち職を辭す。」とある。子良館の後に云々—元祿元年笈の小文に、「神垣のうちに梅一本もなし。いかに故有る事にやと、神司などに尋ね侍れば、たゞ何とはなし、おのづから梅一もともなくて、子良の館の後に一もと侍るよしをかたりつたふ。」とあつて句出る。

【句意】 神垣の内に、梅が一本もないと思つてゐたら、子良ノ館の後に一本残つてゐると言はれ、非常に感動して、お子良子の清淨さを賞美した意である。素丸の説叢大全に、「此句一もとゆかしといふを沈吟すべし。これおこらごをさしての形容の賞詞なり。梅とのみ見るべからず。梅は清淨・潔白なる花なれば、此お子良子のただひとり端正にして、よく神慮に叶ひ、仕へ奉れる事を、梅に喩へて賞詠せし句なり。云々」とある。

【鑑賞】 説叢大全に、「梅をもて少婦・貞女に比する例、古今詩歌など擧ぐるに暇なし。」

とあるやうに、此の句は事實として陳腐なものであるが、無いと思つた梅が、子良ノ館の後にあると教へられたので、深く感動して作つたといふ句作の動機を考へると、床しといふ主観が尤のやうに首肯される。少婦と言つても、お子良子の梅だからよい。

瘦 藪 や 作 り た ふ れ の 軒 の 梅 千 那

【句意】 裏に瘦藪がある。その側に軒端近く、作りかけてそのままになつた梅があつたといふ意。

【鑑賞】 早春の庭の荒れた物淋しい状がよく出てゐる。

灰 田 捨 て 白 梅 う る む 垣 ね かな 九 光

【語意】 うるむ—曇つて艶がなくなる。

【句意】 垣根の側に白梅が咲いてる。その垣の下に灰を捨てたので、灰が煙のやうに廣がつて、白梅の花がうるんで見えたといふ意。

【鑑賞】 田家の簡素な生活がよく表れてゐる。梅の根本に灰を捨てる事は、よく田家でやる事で、白梅に對しても自然でよい。

日 當 り の 梅 咲 く ころ や 屑 牛 房
膳所 支 幽

【語意】 屑牛房—牛房を抜く事は秋である。こゝは冬から春にかけて貯へた牛房である。それも太い奴から食べて、梅の咲く頃には屑になつて了つた。その牛房の屑である。

【句意】 未だ梅は一般には蒼がちで、日當りのよい所だけ、ポツ／＼咲く程度である。冬から貯へた牛房も大方食つて了つて、屑牛房だけ残つたといふ意。

【鑑賞】 之も田家の佗しい早春の生活を示したもので、日當りの梅咲く頃と言つた表現が時間を含み、意味を複雑にさせる。殊に頃とぼんやり言つた所に、餘情があつてよい。

暗香浮動月黄昏

入 相 の 梅 にな り 込 む ひ と き かな
風 麥

【語意】 暗香浮動月黄昏—林和靖の山園小梅の詩句、「疎影横斜水清淺、暗香浮動月黄昏。」前書の詩意、夕月がぼんやり出て、梅のかすかな香が、あたりに浮動してゐる。

【句意】 晩鐘が靜に鳴つてゐる。あたりはだんだん暗くなる。その夕暮の中に梅がほのかに匂うてゐる。鐘の音は梅の香の中に、一つ一つ餘韻を残して鳴り込むといふ意。

【鑑賞】 林和靖の詩句は、月黄昏が中心であるが、此の句は入相の鐘が中心である。入相の鐘が、ほのかに通つてくる梅の匂の中にしみ込むといふ所に、限りなき情趣を含んでゐる。

武江におもむく旅亭の残夢

寝ぐるしき窓の細目や闇の梅 乙 忍

【語意】 武江―江戸。旅亭―旅の宿屋。殘夢―夢の見残し。窓の細目―窓の細い透間。前書文意、江戸へ赴く旅の宿屋で見た夢の残が、まだ頭にあつて、はつきりした氣持になれない。

【句意】 旅の宿の事で、よく寝付かれない。夢を見ても、とかく寢覺勝である。夜が明けても、昨夜の夢が未だ残つて、氣持が悪い。寢苦しいので、窓を少しあけて見ると、闇に浮かぶ白梅が、ほのかな香を送つてくる。

【鑑賞】 元祿四年の旅であらう。旅亭の佗しい實情はよく出てゐる。闇の梅が此の際いやな思を轉換させて、一掬の情味を添へる。窓の細目やが印象的でよい。

【語意】 辛未のとし、彌生のはじめつきた、よしの山に日ぐれて、梅の

にほひしきりなりければ、舊友嵐窓が、見ぬかたの花や匂ひを案内者といふ句を、日ごろはふるき事のやうにおもひ侍れども、折にふれて感動身にしみわたり、涙もおとすばかりなれば、その夜の夢に正しくまみえて、悦べるけしき有り。亡人いまだ風雅を忘れざるや。

夢 さ つ て 又 一 匂 ひ 宵 の 梅 嵐 蘭

【語意】 辛未の歳―元祿四年。見ぬ方の花や云々―まだ見ない方の花は、その匂を案内者として、見て歩かうといふ意。西行の「吉野山こそしのしをりの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねむ」による。ふるき事のやう―陳腐な句のやうに。折にふれて―場合に付けて。場合が場合であるから。風雅―俳諧の道。夢去つて―夢がさめて。前書文意、元祿四年三

月のはじめ頃、吉野山へ行くと日が暮れて、梅の匂が切に通つて来たので、ふと舊友嵐窓の、見ぬかたの花や云々の句を思出した。日頃は此の句を陳い事柄の句のやうに思つてゐたが、場合が場合だけにしみじみと感動されて、涙が出る位になつた。すると其の夜の夢に、嵐窓があり／＼と現れて、大變喜ばしきさうな様子であつた。して見ると嵐窓はまだ風雅を忘れないと見える。

【句意】 夢がさめて驚いてみると、ひとしきり庭前の梅が匂つて来たといふ意。しばらく寝て、嵐窓の夢を見て、驚いて目を覺ましたのだから、宵の梅と言つたのである。

【鑑賞】 前書の事情がなければ、平凡な句になる。もつと故人を偲ぶしみじみした情が出るやうに言へないものか。又一句、ひがよささうに見えて、俗である。

百八のかねて 迷ひや 闇のむめ 其角

【語意】 百八のかねて―百八の鐘の音とかねとかねとかけ合せたのである。除夜の夜半

方々の寺で、百八の鐘を鳴らす習慣があつた。それは人間には百八の煩惱があつて、それを滅せんがためである。

【句意】 闇の中から梅が匂つてくる。併し匂ひだけでは物足りない。匂の起る花を見たい。が闇夜であるから、見えないのは残念である。その闇夜の梅の花を見たいと思ふ事も一の迷であるといふのだらう。

【鑑賞】 かねて迷やといふ主観が謎のやうで面白くない。幻術の第一と考へてゐる作者の俳境も、かゝる人威しの洒落では一向つまらぬものである。

ひとり寝も能き宿とらん初子の日 去 來

【語意】 初子の日―正月初子ノ日。此の日庶民野に出で、小松を曳いて遊ぶ。子の日を根延に寄せて祝つたのであらう。宇多天皇寛平八年、北野の雲林院に行幸され、子の日の宴を開かれた事に始まり、代々殿上の行事となつたといふ。大鏡に、「愚考、民家宜忌録に

曰、正月は獨寢を忌む月也。獨寢れば必ず不祥を招くものなりと。云々」とある。

【句意】 寢を子にかけて、旅中の獨寢にもよき宿を取りたいと言つたのである。

【鑑賞】 能き宿とらんと言つた簡単な希望が俳諧的である。

野 畠 や 鴈 追 ひ の け て 摘 む 若 菜 史 邦

【語意】 若菜―初春の菜類。即ち芹・齊なづな・御行ごぎやう・蕪はこべら・佛座・菘すな・蘿蔔すずしろの七種の菜をいふ。往昔正月の上子の日に、朝廷に於て之を羹として食し、萬病を除くためにした。後民間では七日の朝、是等の菜を俎上に打噺し、粥にたいて食べた。

【句意】 野畠に若菜を摘みに行くと、雁が来てゐて菜を食べて居つた。そこでその雁どもを追ひ立て、菜を摘んだといふ意。

【鑑賞】 雁追ひ退けてがよい。素朴な生活が出てゐる。

は つ つ 市 や 雪 に 漕 ぎ 來 出 る 若 菜 船 風 蘭

【語意】 初市―正月二日にひらかれる魚市や野菜市。

【句意】 若菜を積んだ船が、雪中を漕いで、市場へ行く光景である。若菜にうすく淡雪がかかつてゐる事も餘情である。

【鑑賞】 新しい賑やかな初市の情景がよく出てゐる。

宵 の 月 西 に な づ な の き こ ゆ 也 如 行

【語意】 なづなのきこゆ也―齊を敲く音が聞えたといふ事であるが、七種ななくさを打噺す意味である。七種をはやす行事は、六日の午後四時か七日の午前六時にあつて、七種の菜を俎に載せ、「ななくさなづな、唐土の鳥と、日本の鳥と、渡らぬ先に、」云々と唱へながら、打ち噺すのである。敲く道具は摺小木・火箸・庖丁・さいばし・杓子等の七の品で、俎のわ

きに青菜を少しばかり置き、以上の品を手を持ち、囃しながら叩くのである。七つづゝ七度、四十九度叩くのである。

【句意】宵月が空にぼんやり出てゐる。静かな夜である。西の方の家で、七種を囃してゐる聲がするといふ意。西と言つたのは、東に出る月に對したのであらう。

【鑑賞】六日の宵の静寂な情景である。感のよい句である。

憶翁之客中

裾折りて菜をつみしらん草枕 嵐雪

【語意】憶翁之客中―芭蕉翁の旅中の有様を思ひやる。裾折りて―裾をはしよつて。菜をつみしらん―菜を摘み知らん。

【句意】裾を折つて、菜を摘んで、芭蕉翁の不自由な旅の生活を、しみじみ思ひ知りませ

うといふ意。

【鑑賞】裾折りて菜をつみ、作者自身の動作である。之を芭蕉の動作とすると、句意が分らなくなる。しらんは草枕にかかるのである。作者が裾をはしよつて、菜を摘むのである。それで莊丹の嵐雪發句撮解の、「菜をつみしらんは、菜摘み、水汲み、師に仕ふるの意。」といふわけが分つた。嵐雪の師を慕ふやさしい情はよく出てゐるが、裾折りて菜をつみしらいと續けて來ると、芭蕉が旅中の行爲のやうに思はれて一寸頭を捻らせる。こゝの表現にいくらか無理があるのではなからうか。

つみすて、踏付けがたき若な哉 路通

【句意】若菜を摘んでゐた。始め摘んだのは、勢の悪いものであつたが、摘んで行く中に勢のいゝ青々したものが手に入つた。そこで前に摘んだ草を捨て、了つたが、捨てたものの、むざと踏み付けて了ふのも、勿體ない氣がしたといふ意。

【鑑賞】 若菜は古典的な草であるから、踏み付けて行くのも、風雅を知らぬ者の仕業のやうに思はれて、躊躇されるといふ事だらうが、その心がわるい。似非風流の理窟である。

七種や跡にうかる、朝がらす 其角

【語意】 七種—七種の菜を叩きはやす事。

【句意】 正月七日の朝、七種の菜を叩きはやした後で、向うの屋根か軒に止つてゐた鳥がその拍子に浮かれて、ピョン／＼飛び歩いてゐるといふ意。

【鑑賞】 軽い滑稽味のある句で面白い。跡に浮かるといふ見立が氣が利いてゐる。

我事と鯰のにげし根芹哉 丈艸

【語意】 鯰—和字。泥鰌。

【句意】 芹を摘まうとして、水の中に手を入れた所、鯰は自分を捕へに來たかと思つて逃げたといふ意。

【鑑賞】 鯰の擬人化が滑稽で、作者の洒脱な性格を表してゐる。

うすらひやわづかに咲ける芹の花 其角

【語意】 うすらひ—薄氷。

【句意】 田にうすらひが張つて、その中に芹がやうやく白く咲いてゐたといふ意。

【鑑賞】 五元集に、「河洲八尾娶そしり」と頭書がある。其角が八尾の娶そしりといふ堤を通つた時の實景と見えるが、芹の花が早春咲くものだらうか。芹は早春芽を出し、花の咲くのは三四月頃であらう。田にうすらひが張つてゐるのだから、早春の時季であらうしかたがた理窟に合はない。或は芹に似た花を芹の花に見立てたかも知れない。實際だとすると稀有の場合である。句としては繊細な叙景で、早春のまだ寒い田野の趣は巧に表され

てゐた。

隴とは杳のくろさに月夜かな 其角

【語意】 杳—松。

【句意】 松が黒く見えて、それに月がさしてゐる。かうした景色が春の隴夜の美さを十分味はせる、最も適当な景色であるといふ意。

【鑑賞】 隴夜の美さが作者の第一印象であつたのだらう。その隴夜は—どうした場合の隴夜が、一番美景を呈するかといふと、松が黒く、その上に月がさすといふ場合が、最も面白い眺めであると、かう観じたので、作者は隴とはと眞先に大膽に表現したのであらう。そこに理窟もなければ、小手先の技巧も要しなかつた。作者の無頓着な感情性が表れて面白い句である。

鉢たゝきこぬ夜となれば隴なり 去 來

【語意】 鉢たゝき—鉦や瓢を鳴らし、空也念佛を唱へて、洛内・洛外を巡り歩く乞食坊主。陰曆十一月十三日から四十八夜の修行である。

【句意】 鉢たゝきももう來なくなると、月も隴に霞んで、好もしい夜となるといふ意。

【鑑賞】 しみじみした趣のある句である。作者は隴夜の美さを深く味ふべく、鉢たゝきに思を馳せたのである。加茂川を下つて來る鉢たゝきも來なくなつた。あの哀れな瓢の音、からびた唄の聲も聞かれなくなつた。もう春の夜だ。隴に霞む月の夜だなあと云つたやうな感慨である。隴なりと軽く落してゐるやうだが、心持は却て深い。

鶯の雪踏み落す垣穗かな 伊賀 一 桐

【語意】 垣穗—垣、垣の末。

【句意】 生垣の上に雪がうつつすらかかつてゐる。鶯が飛んで来て、餌でも拾つてゐるのだらう。鶯が動く度に、積つてゐる雪がサラサラとこぼれる。

【鑑賞】 繊細な巧な叙景である。

鶯ややはや一瞬のしたりがほ
江戸 溪石

【語意】 したりがほ—得意な顔。しすまし顔。

【句意】 そろそろ春めいて来た。雪も解け始める。梅も咲きかける。鶯はもう春の一番驅は自分であるといふやうな顔して、得意になつて鳴いてゐるといふ意。

【鑑賞】 平凡な句である。したり顔が俗でいけない。

うぐひすや遠路ながら禮がへし
其角

【語意】 禮がへし—返禮。

【句意】 年禮のかへしに、遠方ではあるが、田舎へ行つた。二十日頃で、だんだん陽氣も暖になり、あちこちで鶯が鳴いてゐる。

【鑑賞】 田舎の長閑なのびくした情景がよく出てゐる。遠路ながらと言つた所に、作者の憶劫がる氣持も含まれて、一層それが廣々した田野で、鶯を聴いてゐる作者の姿を美化してゐる。

鶯や下駄の齒につく小田の土
九 兆

【句意】 用事があつて、田舎へ行つた時の光景であらう。田圃の土が下駄の齒に附いて、歩きにくくて困る。鶯があちこちで長閑に鳴いてゐる。

【鑑賞】 之も長閑な田圃の即事である。田圃の土が柔に解け始め、黒々と光つてゐる状態と想像される。

鶯 や 窓 に 灸やいと を す る な が ら 伊賀 魚 日

【句意】 窓の側で灸を据ゑながら鶯を聞くといふ意。

【鑑賞】 田舎の春暖の長閑な状はよく出てゐる。

やぶの雪柳ばかりはすがた哉 探丸

【句意】 藪にはまだ雪が残つてゐて、附近は春らしい感もしないが、柳だけは春めいた姿をして、青々と芽を吹いてゐる。

【鑑賞】 柳が主である。柳といふ柔い感の植物に對して、藪といふ荒い冷い場所を取合せ、柳の春めいた様子を強く表さうとした句。

此瘡はさるゝの持つべき柳かな 江戸 宅

【語意】 此瘡は―柳の瘡。瘡柳を言つたものか。瘡柳は葉粗く、花少なく、幹に瘡がある楊子又は柳行李を作る。瘡の持つべき―猿の腰掛になるやうな。

【句意】 柳に大きな瘡があつた。此の瘡は猿の腰掛になるやうな場所であるといふ意。

【鑑賞】 滑稽な想像である。瘡は道化たもの、猿も人眞似をする動物で、容貌から動作まで滑稽な感があるから、柳の瘡を猿の腰掛に喩へて滑稽化した。

垣ごしにとらへてはなす柳哉 遠水

【句意】 垣根越しに、柳の青々した枝が、長く垂れてゐる。引張つて見たが、枝がしなやかで、折れもしない。そのまま放して了つた。

【鑑賞】 何となく面白い句である。かうした事はよく私共もやつて見た。何といふ考があつて引張るわけではない。ただ柳の葉が柔く、青々と垂れてゐる所に興味を持つて、一寸

いたづらをして見ただけである。作者の無邪氣な氣持の品よく出てゐる句だ。杉風の折らで過行くむくげかなの句に行き方が似てゐるが、杉風のは似非風流の理窟らしく、此の句には童心があり、香氣がある。

よこた川植處なき柳かな 尙白

【語意】 よこた川―横田川。東海道名所圖會、近江石部の條下に、「田川村の東にあり。横田川村の略語也。水源は甲賀谷の諸流會し、末は野洲川といひて、湖水に入る。」とある。保考の打聽に、「江州なり。川原に石多くして、柳植うる所なし。」とある。附近の横田山は山賊の棲む所であると言はれてゐる。一説に、田の横を流れる溝川とあるが、こゝは地名であらう。

【句意】 横田川は古來近江の歌枕ではあるが、河原に石多く、附近に山賊の棲むやうな山もあつて、淋しい荒れた所であるから、柳を植ゑて趣を添へようと思ふが、植ゑ所のない

のは遺憾であるといふ意。

【鑑賞】 柳を植ゑて面白い眺にしたいといふ作者の風流心は買つてやつてもよいが、かゝる外的な表現では、その心持は深く出るだらうか。

青柳のしだれや鯉の住所 伊賀一啖

【句意】 青柳の枝の垂れてゐる岸の暗い蔭の所が、鯉の澤山ある所であるといふ意。

【鑑賞】 幼稚にして平凡な句。

雪汁や蛤いかす場のすみ 木白

【語意】 雪汁や―雪解の水。場―土間。

【句意】 磯家の土間の隅に蛤が圍つてある。いづれ箆か桶に入れたものだらう。その蛤が

ヂウヂウと鳴く。外では軒先から雪解の水がポタリポタリ落ちるといふ光景。逆志抄に、「雪解の塀間ひまはなどの軒より落つる音、晝夜絶えずちうくと鳴いて、雨だれの音のやうにもなく寒く聞ゆるに、蛤を活けて場の隅すみに置きたる磯家の土間の小ぐらき所に、蛤のちうくと鳴き聲のするを懸け合せての句也。」とある。

【鑑賞】 春先の暖いやうな濕つぽいやうな田家の内の空気はよく描出されてゐる。

待つ 中の 正月 も は や く だ り 月 楊 水

【語意】 くだり月―降り月。十八夜頃から、二十一二夜迄の月。

【句意】 楽しみに待つて居つた正月も夢のやうに過ぎて、空に二十日頃の月を淋しく仰ぐやうになつたといふ意。

【鑑賞】 正月の月は淋しいものである。その正月は楽しい行事に取紛れてぼんやりと暮して了つた。かゝる氣持を月の方に轉換して、降り月と言つた所が面白いのだらう。

田家に在りて

麥 め し に や つ る 戀 か 猫 の 妻 芭 蕉

【語意】 猫の妻―女の戀猫。正月の季。

【句意】 女猫が戀にやつれてゐる状態を滑稽に思つて、麥飯にやつれる戀と言つたのである。それも田家の猫であるから麥飯を想像したのである。

【鑑賞】 麥飯と言つた所が面白い。飄逸であり、野趣がある。

う ら や ま し お も ひ 切 る 時 猫 の 戀 越 人

【句意】 人間は女に戀すると、容易に思ひ切れるものではない。そこへ行くと猫は平氣で

別れて行く。そのさつぱりした態度が羨ましいといふ意。

【鑑賞】 去來抄に、芭蕉の言として、「心に俗情あるもの、一たび口に不出といふ事なし。彼が風雅是に至りて本情をあらはせりとなり。云々」とあるが、去來文に、「おもひ切る時をうらやませるは越人の秀作と被存候。云々」とあつて賞めてゐる。去來抄の芭蕉説は信じられないが、さうかと言つて此の句は去來のいふやうな秀作とも考へられない。猫の戀を人間の戀に比べる事が、既に下卑た情で、たとへそこが俳諧であつたにせよ、誠につまらぬ主觀である。大鏡に、定家の「うらやまし世をもしのがずのら猫の妻戀ひさそふ春の夕ぐれ」の歌によつたものとしてゐるが、かゝる歌が定家にあつたものか詳かでない。何れにしてもいやな句である。

うき友にかまれてねこの空ながめ 去來

【語意】 うき友—無情な、つれない相手の猫。人ならばうき人といふべきであるが、猫だ

からうき友と言つたのであるといふ人もあるがどうかと思ふ。

【句意】 相手の猫に、肘鐵砲どころか、咬み付かれて、ぼんやり空を眺めてゐる戀猫の馬鹿らしい姿を言つたもの。

【鑑賞】 戀猫の騒ぎをかしく感じて言つた句だらうが、さすがに人の戀も惚ばれて、多少あはれに思ふ情も入つてゐるのだらう。上品な句であるが、滑稽な氣もする。

露沾公にて餘寒の當座

春風にぬぎもさだめぬ羽織哉 龜翁

【語意】 露沾公—磐城平の城主、内藤下野守義英。餘寒—寒明けの寒さ。當座—其時の席題。

【句意】 春風が吹き、暖くなつたので、羽織を脱いで見たけれど、寒明けの寒さが残つて

みて、脱いだ羽織を着るやうな日もあつて、定まらないといふ意。

【鑑賞】一寸品よく言ひ廻して、一座を感心させるやうな句である。大名の句會にはふさはしい句だ。

野のむめのちりしほ寒き二月哉 尙白

【語意】ちりしほ―散りしほ。散り際。

【句意】野梅の散り際が、特に寒く感ぜられる、二月であるといふ意。

【鑑賞】野梅であるから、花も白ぼけて、淋しい感がする。それが二月になつて、散る頃になると、散り際が特に寒く思はれるのは、實感であらう。よく實感の焦點を捉へた温雅な句である。

出がはりや櫃にあまれるござのたけ 龜翁

【語意】出がはり―出代。人にも時期にもいふ。毎年二月と八月とにあつた。こゝでは人。櫃―蓋のある長方形の匣。ござのたけ―蓆の長さ。

【句意】出代の時期になつたので、奉公人が手廻りの道具を櫃一杯につめて、部屋の隅へ置いた。蓆もその一品で、その端が櫃から食み出してゐたといふ意。

【鑑賞】下男の出代であらう。たまかな男の下鄙た心が表れて哀感もある。詰めた櫃の間から、蓆の端が出るといふ光景が面白い。

出替や幼ごころに物あはれ 嵐雪

【句意】或家へ奉公に來た子供があつた。出代になつて、親許へ歸らうとする。主人の家でもよくその子供を可愛がつて使つてやつたので、別れる時になると、さすが子供心にも別れるのが悲しくなつたと見え、しほれてゐたといふ意。

【鑑賞】 嵐雪のやさしい細かい感情が表れてよい句だ。幼心が此の句の主眼である。支考の葛の松原に、「嵐雪が幼の一字にて、人に數行の涙をゆづりける也。云々」とある。幼心を主人の子供の心と解する人もあるが、之は奉公人の心に取つた方が、情味がしみじみしよう。

骨柴のかられながら木の芽かな 九 兆

【語意】 骨柴―骨ばつた柴。まだ芽の出ない柴。

【句意】 骨柴は刈られたまゝであるが、附近の木は芽を出してゐるといふ意。

【鑑賞】 眼前の即景であらう。柴は冬でも春でも刈る。度々刈つた方が、きれいに芽が出ると見える。此の句は春刈つた柴で、まだ青い芽は吹いてゐない。併し周りの木立は芽吹いて、春の音信を感じしめる。やがて柴も芽を出すだらう。青々とした柔い芽と言つたやうな句で、骨柴の痛々しい姿を思ひやつた心であらう。

白魚や海苔は下部のかひ合せ 其 角

【語意】 白魚―河海の間に産する長さ一二寸位の魚。體白く、少し青みがある。昔は隅田川が名物であつた。料理法にも種々あつて、吸物に入れて、海苔をかけて食つたり、湯がいて海苔をかけ、醤油をさして食つたりした。かひ合せ―買ひ合せ。買つて置いたもので間に合はせる。

【句意】 白魚に海苔をかけ、酒の肴にしようとしたが、生憎海苔が無い。下男を呼んできいて見ると、海苔は私が持つてゐますといふので、それで間に合せたといふ意。

【鑑賞】 作者の無頓着な豁達な氣象が表れて面白い句だ。

人の手にとられて後や櫻海苔 尾張 杉 峰

【語意】 櫻海苔—壹岐の國に産する海藻。色うす紅く、美味である。酢味噌にて食べる。

【句意】 櫻海苔は人の手に採られ、食膳に供せられてから、世に賞美されるもので、海中の巖に著いてゐる時は、一寸變つた藻である位にしか思はれてゐないだらうといふ意か。

【鑑賞】 少し理窟つばい句だが、櫻海苔を賞めた軽い主観が面白いのだらう。

春雨にたゞき出したたりつくくし 元志

【語意】 つくくし—土筆。杉菜の花。筆穂状を呈する。

【句意】 春雨に打たれて、つくしが草の中から、頭を伸ばしてゐる状である。

【鑑賞】 春雨があがつて、太陽が地上にきらめいてゐる。周囲の草も雨に叩かれ、地上の塵も流し去られ、土筆に附いた泥も洗ひ落され、伸びくと頭を出してゐるその状を春雨にたゞき出したりと云つたのであらう。雨後の土筆の印象がよく出てゐる。

陽炎や取りつきかぬる雪の上 荷兮

【語意】 陽炎—春のうららかな日、地上よりチラチラ立ち上る氣。

【句意】 春にしては珍しい大雪である。太陽が雪の上にかがやいて眩しい位だ。雪の上から陽炎がチラチラ立つてゐるが、何となく陽炎の脚が雪の上に取り付きにくいやうに見えるといふ意。

【鑑賞】 巧な叙景である。取りつきかぬるが鋭い。

かげろふや土もこなさぬあらおこし 百歳

【語意】 こなさぬ—細かにしない。あらおこし—荒起し。土を荒く打返す事。逆志抄に、

「冬千割れたる田を、二月頃うなひ起すをいふなり。それへ水をかけ置きて、こなして苗代にも用ひ、又は植田にも拵へる事也。」とある。

【句意】 荒起しの冬田、まだよく土もこなされてゐない田の上に、陽炎がもえてゐる状。
【鑑賞】 荒つぽい春先の田野の有様がよく出てゐる。

かげろふやほろく落つる岸の砂のたつ土芳

【句意】 小川の岸に春の日がゆるくさしてゐる。乾いた岸の砂がサラサラくこぼれて落ちる。附近の田圃から陽炎がゆらくもえてゐるといふ光景。

【鑑賞】 繊細な叙景である。春日の長閑な田圃の状はよく出てゐる。

いとゆふのいとあそぶ也 虚木立 伊賀 氷 固

【語意】 いとゆふ―糸遊。陽炎の異名。虚木立―大鏡に、「愚考、虚木立は枯木にはあらず。只木の芽の出でざる前にして、から木なり。」とある。逆志抄に、「虚木立はうろこだ

ちと讀むべし。控といふに同じ。大木の幹はうつろになりたるが、葉を芽ぐみたるばかりにて、その控の中より、糸遊の長閑に見ゆるを云ひ立てたる句なり。」とあるがいかに。

【句意】 虚木立の上に陽炎がチラチラもえてゐるといふだけの事。

【鑑賞】 文字の洒落である。糸遊の糸と言つた軽い洒落が面白いだけの事で、内容のない句である。

野馬に子供あそぶす狐哉 九兆

【語意】 野馬―陽炎。莊子逍遙篇に、「野馬塵埃也。生物以息吹者也。希逸註云、野馬遊糸也。水氣也。」とある。

【句意】 野原に陽炎がもえてゐる。日はうららかにさして暖い。草の上に狐が自分の子供を遊ばしてゐるといふ意。

【鑑賞】 春の野の長閑な光景はよく出てゐるが、陽炎と言ひ、狐と言ひ、何となく氣味の

悪いロマンチックな連想がある。實景であらうが、特殊な場合のやうな氣持もする。

か げ ろ ふ や 柴 胡 の 糸 の 薄 曇 芭 蕉

【語意】 柴胡—春地に叢生し、二尺位伸びる。葉は丸いものと細長いものとある。夏の末葉の先から枝を出し、黄花をひらく。根は淡紅色を帯び、薬用となる。古來鎌倉柴胡・河原柴胡の別があつて、鎌倉柴胡の方は葉が細く、糸のやうに見えるので、此の場合の柴胡に當るのであらうといふ説もあるし、又細葉を方言で糸柴胡といふから、その柴胡であらうなどの説もある。大鏡に、「一書に云、一本に柴胡の原と書きたるは非なり。柴胡のはえあるものなればなり。」とあるが、標注には、「原本柴胡の糸ニ作ル。芽出シノ細キヲイフカ。按ズルニ原ノ書損ニヤ。糸・原相似タリ。」ともある。

【句意】 野の遠近に陽炎が立つてゐる。空はうすく曇り、そこら一面に生へる柴胡の葉が細く糸のやうに見えて、一層空の曇を増すやうに思はれるといふ意。

【鑑賞】 原とすると眼前の光景がぼんやり表はされる事になるが、糸とすると技巧が眼立つて、芭蕉の句とも思へなくなる。但し諸説定まらないから、假に糸として註する。

いとゆふに貌引きのばせ作り獨活 伊賀配力

【語意】 貌引きのばせ—ただ芽を伸ばせといふ事ではあるまい。のんびりした顔になれ、ゆつたりした顔をしろといふやうな意味ではなからうか。作り獨活—畠に作られた獨活。獨活は莖に節があり、葉は莖を抱いて互生する。春その若芽を食用にする。逆志抄に、「日當りよき所に、藁ごみを堆く積みかさねて、もやし出す。云々」とある。

【句意】 獨活畠に陽炎がもえてゐる。天氣もよし、暖かでもあるしするから、獨活よ、くすんだいぢけた顔をしないで、ゆつたり芽を伸ばさいといふ意だらう。

【鑑賞】 俗に獨活の大木といふ喩もあるから、貌引き伸せと滑稽的に見て言つたものかと思ふ。糸遊であるから獨活も長閑に見えなくてはなるまい。

狗脊くわいせきの塵にえらるゝわらびかな 嵐雪

【語意】 狗脊—蕨。蕨の一種。山野に自生する。形状かたち蕨に似て太く、芽の端捲曲し、綿の如きものにつままれる。その芽を食用にする。和漢三才圖會に、「其根黒色、長三四寸、多岐、似狗之脊骨。」とある。わらび—蕨。山野に自生する。春芽を出し、芽の末端巻きて拳の如き形をなす。その芽葉を食用にする。

【句意】 取つて來た蕨の塵を選んでみると、その中に狗脊が入つてゐたので、それを塵と共に選り出したといふ意。雀志の玄峰集の註に、「ぜんまいは蕨の中のちりぞとや。紫塵の中の又ちりや、との一曲をかなでて打興じたるなり。」とある。

【鑑賞】 かうした唄があるとすると、狗脊を選り出す姿まで思ひやられて面白くなる。

彼岸まへさむさも一夜二夜哉 路通

【語意】 彼岸—春分・秋分の日を中日とし、その前後三日を合せた七日間をいふ。其の間佛事を修める。

【句意】 彼岸が近付いて、だんだんより陽氣になつて來るから、寒い日があると言つても此の分なら一晩か二晩位の辛抱であるとの意。

【鑑賞】 平凡な句である。但し作者が路通なら實感もうなづけよう。

みのむしや常のなりにて涅槃像 野水

【語意】 常のなり—ふだんの身なり。涅槃像—釋迦入滅の様を描ける圖。佛説によると、此の日諸天・人間を始として、鳥獸・魚蟲に至る迄、悉皆の有情枕頭に集まり、悲歎にくれたとある。入滅の日は二月十五日、諸寺の法要がある。

【句意】 釋迦入滅の日、叢蟲も來て、ふだんのなりで、枕頭に悲んだといふ意。

【鑑賞】 蓼蟲は俳味ある蟲で、芭蕉の好んだもの。その蓼蟲がふだんのなりで、釋迦入滅の日にやつて来たといふ想像は、奇抜でもあり、飄逸でもあつた。佛を佛とも思はない俳人の人生觀が面白い。

藏 並 ぶ 裏 は 燕 の か よ ひ 道 九 兆

【句意】 酒問屋のある裏町、門並に酒藏が並んで、そこを燕が輕快な翼をひるがへして往來する光景。

【鑑賞】 平凡な句である。酒藏と燕のかけ合せも陳い。

立 ち さ わ ぐ 今 や 紀 の 雁 い せ の 雁 伊 賀 澤 雉

【句意】 田か沼に居つた雁が、春になつたので、北の方へ飛び去らうとしてゐる中に、紀

伊の雁や伊勢の雁も交つてゐて騒いでゐる光景である。蓼太考に、「紀伊・伊勢は南國故、春暖早くも雁の歸仕度する姿にて、紀の雁・伊勢の雁といへるその廣く夥しきさま、おのづから句中に歸雁をこめて句作支妙也。」とある。

【鑑賞】 雁が頭上で騒いでゐるのではない。一定の場所に居て歸らうと騒いでゐるのである。場所も廣いし、數もおびただしく居る事が想像される。紀伊も伊勢も伊賀の南に寄つてゐるから、特に注目されたのであらう。

春 雨 や や ね の 小 草 に 花 咲 き ぬ 嵐 虎

【句意】 春雨がいつ迄も降りつよぐので、退屈して了つた。向うの屋根を見ると、草が生へて、花が咲いてゐるといふ意。

【鑑賞】 親當の連歌に、「名もしらぬ小草花咲く川邊哉」といふ名吟があるが、それを俳諧的に燒直したやうな句である。親當の發句より、事柄も具象化され、意味も複雑になつ

てはゐるが、小草に花咲きぬが連歌のぬめりを脱し切れぬ。

高山に臥して。

春雨や山より出づる雲の門 猿 雖

【句意】 山中の僧房にでも起臥した吟であらうか。山も住み飽きたから下山しようと、空を仰いで見ると、春雨が細かに降つて、煙のやうな雲が全山を覆ひ、立ち出づる山門も雲に埋められたといふ意であらう。

【鑑賞】 杜甫の陪鄭廣文遊何將軍山林二十首の中に、「出門流水佳、回首白雲多」といふ詩句があるが、かゝる境地の一轉であらうか。格高く、趣幽なと言つたやうな句に近

不精さやかき起されし春の雨 芭蕉

【句意】 春雨の朝、いゝ氣持になつて寝てゐると、宿の者からもういゝかげん起きたらどうだと言つて起されたので、自分ながらその不精に恥ぢ入つたといふ意。

【鑑賞】 竹人の全傳に、赤阪の庵にてとある。兄半左衛門の屋敷に泊つてゐた時の吟と見える。不精さやといふ主觀表現が單純で面白くない。之では漢詩の春眠不覺曉とか睡足猶慵起などの境地をいくらも出ない。

春雨や田叢のしまの 鋤賣 史邦

【語意】 田叢の島―秋里籬島の攝津名所圖會に、「或は云、浦江大仁の地也。一説には佃島に田叢ノ島と稱する地これなりとぞ。云々」

古今

難波瀉汐みちくらしあま衣たみのの嶋に鶴鳴きわたる

讀人不知

同

なにはへまかりける時、たみのの島にて雨にあひてよめる

雨により田義の島をけふ行けば名には隠れぬものにぞありける 貫之

風雅

ほさでけふいくかになりぬあま衣田義の嶋の五月雨の頃 高階重茂

又曉鐘成の攝津名所圖繪大成に、佃島・住吉神社の間に、佃・住吉神社と題して、「田義島古一漁村、何日更名菟玖田、只有清江浮蛟月、幽人夜々叩吟舷、鵜飼石齋の詩が入つてゐた。なほ蘆分船の記事を引用して、「此嶋は天王寺の傍なりと顯照はいへり。又宗祇方角抄を見侍れば、天王寺の西乾の方よりの海邊なり。海道より南なりとあり。…ここ又源氏潯標の巻に、光源氏都より住吉へ詣で給ふに、明石の上に田義嶋にて行逢ひ給ふ事あり。後人尙考ふべし。」とあるし、足利義詮の「住吉詣」の文を掲げ、「貞治三年卯月上旬の頃、津の國難波の浦見むとて、彼所に詣うでけるに、淀より船に乗りて、こゝ

の河面、かしこの山々を眺め行くに、…田義の嶋にあがりて見れば、あまの釣する船ともあまた岸のほとりに漕ぎ寄せてやすらひるたり。釣のうけ縄、ぬれたる網を、木の枝にかけて置きたるを見て、

雨ふれど降らねどかはくひまそなき田義の嶋のあまの濡衣

それより南にあたりて、野田の玉河といふ所あり。此ほとり藤の花咲き亂れたり。云々ともあつた。一目玉鉢に、「今の北濱といふ所なり。」ともある。要するに此の島は室町時代迄は所在地も明かであつたが、徳川以降無くなつたと見え、所在地も不明となつた。

【句意】 田義ノ島は古來有名な歌枕であつて、和歌には鶴を詠んだり、五月雨の趣を賞したりしたが、今は所在地も詳かでなく、昔漁村であつた名残として、春雨の中を鰯賣が呼ばつて行くのがなつかしいといふ意。

【鑑賞】 和歌に鶴や五月雨を詠んでゐるので、それを俳諧化して春雨の鰯賣と言つたものだらうと思ふ。懐古的な句で、そこが此の句の價值であらう。

はるさめのあがるや軒になく雀 羽紅

【語意】 あがる―降り止む。空が明るくなる。

【句意】 春雨が降り止んで、空が明るくなり、軒先に雀が来て、うれしさうに鳴く光景である。

【鑑賞】 軽い朗かな作者の感情がよく表れてゐる。事柄としては平凡であるが、気分を味ふべきである。

泥龜や苗代水の畦づたひ 史邦

【語意】 泥龜―スツボン。苗代水―靱を蒔いて、苗を成長させる田へ引く水。

【句意】 泥龜が水の満ちた苗代田の畦を傳ひ歩く光景。

【鑑賞】 去來抄に、「猿蓑の撰に、予(去來)誤りて、畦づたひと書入れたり、先師曰、畦

うつりと傳ひと、形容・風流各別なり。殊に畦うつりして蛙鳴くなりともよめり。肝要の氣色をあやまる事、筆の罪のみにあらず。句を聞く事のおろそかなる故なりとて、きげんあしかりけり。」とある。畦うつりの方が、泥龜の重い鈍い動作も表れるし、畦を越えて隣の田へ落ちる舉動迄も連想されて面白い。

蜂とまると 栗の竹や虫の糞 昌房

【語意】 栗―壁の下地で、竹などを編目に組んで作る。

【句意】 田家の納屋などの壁が落ちて、栗が表れた上に蜂がとまる。恐らく巢でも作らうとして、ブンブン飛び廻つてゐるのだらう。その竹も虫が食つて、虫の糞が汚く附いてゐるといふ意。

【鑑賞】 田家の簡素な生活の表れた句で、却て野趣に富んで面白い。蜂とまるとは、蜂がいつ迄も止つてゐるのではなく、壁の穴にもぐつたり、表へ出て來たり、或は一寸飛び上

つては止つたり、種々の動作を含んでゐる表現である。

振舞や下座になほる去年の雛 去來

【語意】 振舞—行ひ、仕業。逆志抄に、「此振舞は饗應の振舞にはあらず。形ふり、取あつかひの事をいふなり。云々」とある。下座—末席。なほる—正しく坐る。

【句意】 去年の雛人形を下座に直したといふ意であるが、雛を飾る家の人が、子供達に謙讓の美德を教へるために行つた事と、作者が考へて見た句であらうと思ふ。

【鑑賞】 振舞やがぼんやりした表現で、意味あげな句になつて了つた。去來抄に、「此句は予（去來）思ふ所ありて作す。五文字、古烏帽子・紙衣等はいひ過ぎたり。景物は下心徹せず。あさましや、口惜しやの類ははかなしと、今の冠を置きて伺ひければ、先師曰、五文字に心をこめて置かば、信徳が人の世やなるべし。十分ならずとも、振舞にて堪忍あるべしとなり。」とある。去來の思ふ所ありてがよく分らないが、恐らく道德的寓意あるや

うに言はうと考へたのであらう。古烏帽子・紙衣・或は淺ましや・口惜しや、何れにしても古雛の佗しげな状を言はうとした意味は分るが、振舞やとすると、古雛を下座に置いた主人の取扱の事となつて、裏面に一理窟ありさうに考へられる。そこが此の句の意味を徹底させない理由でもあるし、同時に又面白くない主觀とも見られよう。

春風にかかすな雛の駕籠の衆 伊賀 萩子

【語意】 こかすな—倒すな。雛の駕籠の衆—雛の駕籠を擔ぐ人。京傳の骨董集其他によると、元祿の頃雛の使といふ事があつて、草餅はかいを行器に入れ、醴あまどけ（或は白酒）を錫の徳利に入れ、小蛤を澤山附けて、節句の禮と言つて、雛を小さな駕籠に入れ、行器などを釣臺に載せ、親類へ届ける風習があつた。駕籠を擔ぐ人は普通女の子で、師宣の描いた年中行事といふ印本にその圖が出てゐるさうだ。

【句意】 雛の駕籠を擔ぐ人よ。春風に内の雛を倒さないやうにして下さいといふ意。

【鑑賞】 軽い興味で、それが雛をかつぐ女の子に向つて言ふのだから艶つぽい感がある。鴛籠を擔ぐ女の兒も、白酒に多少酔つて、顔をほんのり染めてゐたのだらう。さうした餘情もあつて、こかすなが面白い。去來抄に、「先師此句を評して曰、伊賀の作者あだなる所を作して、なつかしとなり。云々」とあるが、此のあだはあどの誤で、あどなしといふ意味である。あどなしはあどけなしの義、即ち無邪氣である事である。こかすなと言つた主觀が無邪氣なのであらう。

桃柳くばりありくやをんなの子 羽紅

【語意】 桃柳―雛祭には昔は桃と柳を花瓶にさして供へたものである。草餅を入れる行器にも、桃の繪櫃、柳の繪櫃とあつて、櫃の上に桃や柳を畫いた。

【句意】 お雛様に供へた桃や柳を、女の兒が嬉しがつて隣近所へ配る状態である。節句當日の行事であらう。

【鑑賞】 雛祭の女の子の無邪氣な氣持がよく出てゐる。作者が女だけに此の間の情味は一層深からうと考へる。

三川

もよの花境しまらぬかきね哉 鳥巢

【語意】 境しまらぬ―隣家との地境の垣根が十分結はれてゐない。

【句意】 地境のよく結はれてゐない破れ垣根の傍に、桃の花が咲いてゐる光景。

【鑑賞】 素朴な表現で却て田家の裏畠の自由な状がよく出てゐる。野趣があつて面白い。

里人の躰落したる田螺かな 嵐椎

【句意】 田螺を百姓の躰に喩へて、躰を落したと言つたのである。

【鑑賞】 譬喩が飄逸で面白い。其角の「權五郎の片眼を拾ふ田螺かな」に比べて、此の句

の方が自然で、素朴でよい。権五郎の田螺は例の作意に凝つて、奇抜過ぎる。

蝶の来て一夜寝にけり葱のぎぼ 半歳

【語意】 葱のぎぼ—葱の花。葱坊主。

【句意】 蝶が葱の花に止つて、一夜の夢を結んだといふ意。

【鑑賞】 蝶の哀な状を痛しく思つて詠んだ句であらう。葱の花は佻しい花で、面白味のないものである。その面白味の無い花に来て、蝶が一夜の夢を結んだといふのだから、蝶のはかなげな様子は思ひやられる。野の蝶、葱坊主に眠る蝶、さうは言つても、そこに野趣はある。それも捨てがたい情味である。大鏡に、「古連曰、人丸の野をなつかしみ一夜寝にけりの裁入か。」とある。

番 鶯 切れて白根が嶽を行方哉 加嘉山中 桃 妖

【語意】 番鶯—紙鶯、風。白根が嶽—加賀の白山。

【句意】 風が切れて、白山の方へ遙に飛び去つたといふ意。

【鑑賞】 風をあげる場所は、廣々した田野であつたと見える。野の末に白山が聳えてゐてその方に風が悠々と飛び去つて行く、長閑なゆつたりした春の日を想像させる。

い かのぼりこゝにもすむや 伊賀 園 風

【語意】 いかのぼり—紙鶯。すむ—澄む。影が澄む。漙—雨後地上のたまり水。

【句意】 附近の廣場で風を揚げてゐる。雨は霽れ上つて、天氣はよし、風はある。風がよく揚がる。青空に唸つて、動かうともしない。ふと傍の水たまりを見ると、青空をうつして、風は水の上に澄んでゐる。

【鑑賞】 こゝにも澄むやが新しい言方である。空にばかり氣を取られてゐたが、やがて側

の水たまりを見て、やあ、こゝにも風が澄み切つて映つてみると驚いた様である。清新な感の句だ。

日の影やごもくの上の親すゝめ 玲 碩

【語意】 ごもく—ごみため。捨てたごみ。

【句意】 捨てた塵芥の上に、親雀が来て餌を拾つてゐる。恐らく子雀に運ぶためであらう。その塵芥の上に日が暖くさしてゐる。

【鑑賞】 たいした句ではない。ただかうした光景が春のなごやかな空気を漂はせるといふだけである。嘯山は寒心刺骨と賞めてゐるが（俳諧古選）、それは道徳的批判であつて、詩の批判とはならない。親雀が子雀を愛する情は出てゐない事もないが、それは私共を深く動かす程のものでない。昔の人はとかくつまらぬ句に道徳感情を動かして、句の善悪を定めようとするからいけない。

荷鞍ふむ春のすゝめや縁の先 土 芳

【語意】 荷鞍—荷を積む馬の鞍。

【句意】 問屋場などの縁先に荷鞍が下してあつた。そこに雀が来て、チュツ、チュツと鳴きながら、鞍の上を踏み歩く有様である。

【鑑賞】 春日のさす問屋場などの長閑な縁先の光景はよく出てゐる。荷鞍ふむがよい。踏むと言つた所に、雀の重い落着いた動作が思はれて、春日の長閑さを感じさせる。

闇の夜や巢をまどはしてなく 衛 芭 蕉

【語意】 巢をまどはして—巢を惑はして、巢のありが分らなくなつて。衛—千鳥。水禽。頭・嘴蒼黒色、頬・腹白く、脊・胸青黒色、脚黄に細長い。冬河海の岸の邊に群り飛

ぶ。

【句意】闇夜に巢が分らなくなつて、千鳥が鳴いてゐるといふ意。句選年考に、「按ずるに、千鳥は磯の砂を少しくぼめて卵をなし、いくつもありと云へり。闇の夜に巢を出で侍らば、いかさま惑ひもすべき風情の物なりとかや。」とある。

【鑑賞】巢の在りかを失つた千鳥の哀な鳴き聲は淋しいものであらう。古來此の句の季に就いて、冬・夏・春の論があつた。樺柯は春季の誤れる由を論じ、「闇の夜や巢をまどはしてといふ所、寒夜のさま言外に聞えて、云々」とあつて、冬季の句とする(逆志抄)。蓼太は「水鳥の巢は夏也。」と論じて、夏の句とする(句解)。吾山は連歌産衣の説を引用し、「千鳥、水邊體用の外也。浪に浮寝などとはせぬ事也。……濱・磯・洲・河原又は淺瀬にゐて、汐さしくれば必ず飛去るなり。云々」(朱紫)と論じ、春季に定めてゐる。

越こより飛驒へ行くとして、籠のわたりのあやうきところぐ、道もなき山路にさまよひて

鶯の巢の榊の枯枝に日は入りぬ 九 兆

【語意】越こは越中である。籠のわたり—蓼太考に閑田耕筆の文を引用し、「籠のわたりは飛驒の國吉城郡中山村にあり。神通川に渡す。川幅二十五間、綱まで高さ十五間餘河の北蟹寺といふ。河の南飛驒中山といふ。大綱三筋をわたし、かくるに小籠をもてす。其中にうづくまるを、籠に兩綱ありて、前岸是を引き、後の岸是を送り、南北より相助け辛うじて渡る。云々。徒に安く過ぎ來ぬ山藤の籠のわたりもあればあるもの(衣笠内大臣)。籠は木をたはめて幹とし、底は藤をもて編む事、蜘蛛の網の如し。云々」とある。鶯の巢—春季。榊—楠。丈十餘丈に及ぶ常緑木。前書文意、越中から飛驒へ行くとして、籠のわたりのやうな危い場所を幾度も通つて、道もない山路に迷つて。

【句意】谷に添うた林の中に、楠の大木が聳えてゐる。その梢に鶯の巢があつて、枝は枯れてゐた。夕日は山間に沈んで、赤い陽の名残を、あたりの木立に投げてゐるといふ意。

【鑑賞】 深山の日暮の物凄さと心細さがよく出てゐる。

かすみより見えくる雲のかしら哉

伊賀
石口

【句意】 曉の山々に霞がかゝつて、少し風がある。やがて時の経つに従ひ、谷から出て来る雲の頭が、霞の上に見え出したといふ意。

【鑑賞】 朝早く山路を下つて行くと、よくこんな景色に逢ふ事がある。左右は山嶺、森もあつて、遠い向うの山には霞がほんのりかかつてゐる。その中に霞が薄らいで、ぼうとした霞の上に、雲の頭がもく／＼と動き出して来る。實に壯大なすが／＼しい眺である。

子や待たん餘り雲雀の高あがり
杉風

【語意】 雲雀―雀に似て少し大。腹灰白色。頭・脊に黒斑がある。脚・尾長く、地上に巢

食ひ、春空高く轉る。

【句意】 子供を連れて野へ行つた。長閑な日で、雲雀が空高く鳴いてゐる。すると今鳴いて居つた雲雀が、あまり高く舞ひ上つたと見え、鳴き聲が聞えなくなつた。子供は待ちくたびれて不審がる。雲雀よ、子供が待つてゐるようから、あまり高く上らないで、聲を聞かしてくれといふやうな意。

【鑑賞】 子供を連れて雲雀を聞く心持はよく出てゐる。親も子のためには無邪氣になり、子も亦親に甘へて雲雀の行方をたづねる。愛情の美しい場面である。子や待たんは、憶良の「憶良らは今はまからむ子泣くらむ云々」の言ひ換へであらう。

ひばりなく中の拍子や雉子の聲
芭蕉

【語意】 雉子―山野に棲む鳥。眼紅く、頭・胸・腹・頸の羽毛に光澤がある。尾長く、地上に巢食ひ、肉美味。

【句意】 雲雀が空高く囀る中に、拍子を取るやうに、雉子が地上に鳴くといふ意。

【鑑賞】 軽い即興である。あかさうしに此の句をかかけ、「此句ひばりの鳴きつゞけたる中に、雉子折々鳴き入るけしきをいひて、長閑なる味を取らんと、いろくして是を究む。」とあるが、中の拍子やが月並臭い。

芭蕉庵のふるきを訪ふ

董 草 小 鍋 洗 ひ し あ と や こ れ 曲 水

【語意】 芭蕉庵の古き云々―嵯峨日記、元祿四年四月二十二日の條下、「暮方去來より消息す。乙州が武江より歸り侍るとて、朋友・門人の消息どもあまた届く。其中曲水狀に、予がすみすてし芭蕉の舊庵尋ねて、宗波に逢ふよし。」とあつて、「むかし誰小鍋洗ひしすみれ草」とある。猿蓑撰の時、かう直したものと見える。

【鑑賞】 師を思ふ情は出てゐるが、平凡な句のやうに思はれる。

木 瓜 筋 旅 し て 見 た く 野 は な り ぬ 江戸 山 店

【語意】 木瓜―山野に自生するものと、鉢植に觀賞するものとある。枝に刺があり、春紅又は白の花をひらく。秋實なる。本草に利筋骨とある。筋―薊。山野に自生する。葉細長く、きりこみがある。蓼・莖に刺がある。晩春紅紫色の花を開く。一名ホネツギ草といはれる。

【句意】 野に木瓜や薊が咲いたから、旅をしたくなつたといふ意。

【鑑賞】 木瓜や薊は素朴な野趣に富んだ花であるから、その花を見て旅行したくなつたといふのだが、一面大鏡説のやうに、木瓜や薊は筋骨を丈夫にする草であるから、それを見てなほ旅行氣分をそゝられたといふ意味があるのかも知れない。

畫 讚

山吹や宇治の焙爐の匂ふ時 芭蕉

【語意】 畫讚一畫の上に題した詩歌。旅寢論に、「一とせ人々集まりて、木曾塚の句を吟じけるに、先師一句も取り給はず。門人に語りて曰、都て物の讚・名所等の句は、まづその場を知るを肝要とす。西行の讚を文覺の繪に書き、明石の發句を松島にも用ひ侍らんは淺ましかるべし。句の善悪は第二の事なりとなり。云々」とある。焙爐一字の宋音。框に紙を張り、爐の上に置き、茶を乾かすに用ひる具。

【句意】 山吹が美しく咲いてゐる。嘗て自分は宇治の里へ行つて、茶を乾かす匂をうれしく思つた。今山吹を見ると、其時のやうな感じがしてなつかしいといふ意か。山吹の繪を見て、宇治を思出して、詠んだ句であらう。

【鑑賞】 品のよい句だけれど、茶を乾かす香しい匂と山吹の花の感と、自分にはピッタリ

頭に來ない。

白玉の露にきはづく椿かな 車來

【語意】 きはづく一際立つて見える。

【句意】 白椿の玉のやうな眞白な瓣が、露に一層際立つて美しく見るといふ意だらう。

【鑑賞】 玉の露と白玉椿の白玉とをかけた合せた句であらうが特に勝れた技巧も見えない。

わが身かよわく、病がちなりければ、髪けづらんも物むづかしく
此春さまをかへて

筭もくしも昔やちり椿 羽紅

【語意】 前書文意、自分は體が弱く、病勝ちであるから、髪を結ふのも臆劫に思つて、この春（元祿四年春）尼になつて。

【句意】 自分は尼になつたから、笄も櫛も不用になつて、昔の形見となつて了つた。自分は散椿のやうな佗しい姿をしてゐるが、結局此の方が樂でよいといふ意。

【鑑賞】 自分を散椿に喩へた所に寂があつてよい。

蝸牛 打ちかぶせたるつばき哉

津國山本
坂上氏

【句意】 椿の花の地上にうつ向いて落ちた状態を、蝸牛が脊中を見せて伏さつてゐる形に喩へたのである。

【鑑賞】 落椿を蝸牛に喩へた所が面白い。奇抜だが、野趣がある。

うぐひすの笠おとしたる椿哉 芭蕉

【語意】 鶯の笠「青柳を片糸によりてうぐひすのぬふてふ笠は梅の花笠」（催馬樂）。「鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさん老かくるやと」（古今集）。

【句意】 椿の花が紅く點々と地上に散ちてゐる状態を、鶯が落した花笠と言つたのである。

【鑑賞】 和歌では鶯の笠を梅の花に見立てゝゐるが、此の因襲から脱却して、鶯の笠を椿の花に見立てた所が、新しくもあり、俳味がある。大鏡に、「愚考、鶯の笠に讀み來るは、皆是梅花なりしを、翁はじめて椿の新しきを見出し給ひしなり。云々」とある。

はつざくらまた追々にさけばこそ
伊賀 利雪

【句意】 初櫻と言つて、特に人から賞美されるのは、又後から後からと花が咲くからであるといふ意。

【鑑賞】 單なる風雅の理窟として許されたのだらうが、かかる理窟つばい觀照が第一いけ

ない。

東叡山にあそぶ

小坊主や姿にかくれて山ざくら 其角

【語意】 東叡山に遊ぶ—東叡山は上野の山、忍ヶ岡。其角の雑談集に、「その去年にかはりて、山の賑ひ又更なり。」とある。即ち去年は東叡山の門跡が薨去されたので、花見も淋しかったが、今年は賑になつたのである。姿—松。

【句意】 去年と變り、今年は花見も賑かになつて、寺の小坊主が松にかくれ、かくれんぼをして遊んでゐるといふ意。

【鑑賞】 其角の作としては平淡な句である。御門跡御薨去といふ事實を知つて味ふべきである。

一枝はをらぬもわろし山ざくら 尙白

【句意】 櫻の一枝位は、折つて歸らなければ、無風流な奴だと言はれるから、折るのも悪いが、仕方なく折つて歸らうといふ意。

【鑑賞】 俗情、似非風流。月並の句である。

鶏の聲もきこゆるやま櫻 九兆

【句意】 山を越え、谷を涉つて、なほ深く花を尋ねると、向うに人家が見え、鶏の聲が聞える。何となく桃源郷に入つたやうな氣がしたといふ意だらう。

【鑑賞】 麓の村里と離れた、山間の仙郷ともいふべき里の花見だから面白い。蓼太考に、「里近き山也。」とあるが、里近き山とすると、鶏の聲が山間の櫻狩にひびかない。山間に

一仙郷を見出した驚と喜があつて、この櫻狩が面白くなるのである。

眞先に見し枝ならんちる櫻 丈艸

【句意】 櫻の花を見てゐる。梢から花片がハラ／＼と散りかゝる。恐らく之は我も人も、眞先に見た花の枝であらうといふ意。

【鑑賞】 散る花を見ての静かな想像である。單なる理窟ではない。作者は僧であるから、とかく物事を主觀的に考へる傾向はあるが、その氣持に品位と深さがある。

有明のはつくに咲く遅ざくら 史邦

【語意】 はつ／＼端々。辛うじて届くこと。遅櫻—普通の花季より後れて咲く櫻。

【句意】 有明月が影を消さうとする間に遅櫻が咲いてゐるといふ意。

【鑑賞】 朝の月の淡い光を受けた遅櫻の美景は想像されるが、特殊の場合を描かうとした嫌はあらう。

常齋にはづれてけふは花の鳥 千那

【語意】 齋—僧家の食事。正午を過ぎざるを法とするが、大方定まつた時刻がある。

【句意】 花に遊ぶ小鳥のやうに、今日は一日花見に暮らして、常齋に外れて了つたといふ意。

【鑑賞】 洒落な上品な氣持はある。

葛城のふもとを過ぎる

猶見たし花に明け行く神の顔 芭蕉

【語意】 葛城の麓—泊船集に、「大和の國を行脚して、葛城山の麓を過ぐるに、四方の花は盛にて、峰々は霞み渡りたる曙の氣色いと艶なるに、彼の神の御形悪しと、人の口さがなく世に言ひ傳へ侍れば、」とある。大和の西にある峰で、一言主ノ神を祭る。奥儀抄に、「昔大和ノ國に役ノ優婆塞うはそくと言ひける者、ゆきよかりなむと言ひて、葛城山・吉野山の間に橋を渡さんと思ひて、日本國の神々に祈り乞ふに、葛城にゐます一言主といふ神、一夜の間にかの山この山の峰に、石の橋を渡し始めて、晝はかたちの見にくきにはぐかりて渡さぬを、役遅かりなどと云ひて、云々」とある。

【句意】 一言主ノ神の傳説に基いたもので、花は盛であるし、峰々は霞み渡り、曙の景色何とも言へぬほど美しいから、此の美景の中で、容が醜いと言はれてゐる一言主ノ神の顔を、是非見たいものであるといふ意。

【鑑賞】 猶見たしの猶は、お顔が醜いと人からわるく言ひ傳へられてゐる神様のお顔だから、なほ見たいといふ意である。芭蕉の心には、神の氣高いお姿、花の曙の中に現はれ給ふそのお顔、形が醜くとも、その尊いお姿が慕はしいといふのである。傳説化された、ロマンティックな想像、その氣持がうれしい。

いがの國花垣の庄は、そのかみ南良なつらの八重櫻の料に附せられけると、云ひ傳へはんべれば

一里はみな花守の子孫かや 同

【語意】 花垣の庄—伊賀ノ國名張川の東岸にある。吏登の七部搜に、「或書に、上東門院南都の櫻を掖庭に移し植ゑ給はんとありしに、興福寺の僧徒、この櫻は我寺の靈木也、たとへ尊命に背くとも叶ふまじと怒りければ、感せさせ給ひて、伊賀ノ國余野の庄を寄附せられ、毎年花の時は垣をめぐらし、宿直させて守れ、他に移す事なかれ、剪る事なかれとありしより、余野の庄を花垣と呼ぶ。云々」とある。南良の八重櫻—奈良の八重櫻。伊勢、

大輔、「いにしへの奈良の都の入重さくらけふ九重に匂ひぬるかな」の和歌で有名である。料一料地。前書文意、伊賀ノ國花垣の庄は、その昔奈良の入重櫻を守る料地として、朝廷から附けられたものであると言ひ傳へられて居るから。

【句意】 此の一里の人は、皆花守の子孫であるかなあ。尊い事であるといふ意。

【鑑賞】 花垣の庄の故事を知つて味ふと、作者の主観がしみぐと分る。

亡父の墓、東武谷中に有りしに、三歳にて別れ、廿年の後かの地

にかへりぬ。墓の前に櫻植ゑ置き侍るよし、かねぐ母の物がた

りつたへて、その櫻をたづね侘びけるに、他の墓猶さくら咲きみ

だれ侍れば

まがはしや花吸ふ蜂の往き還り 園 風

【語意】 まがはし―紛らはしい。前書文意、亡父の墓は江戸谷中にあつたが、三歳の時別れたきり、二十年後になつて江戸へ歸つて來た。墓の前に櫻が植ゑてあるさうだといふ事を、かねぐ母から語られてゐるので、墓地へ行つてその櫻を尋ねて見たが、なか―見付からないで困つてゐると、他の墓にまだ櫻が咲き亂れてゐたので。

【句意】 花の蜜を吸ふ蜂が、墓の間を往つたり來たりして迷つてゐるやうに、私は母の物語をあてにして、父の墓をあちこちと尋ね廻つてゐるが、どれが父の墓だか紛らはしく、誠に困つて了つたといふ意。

【鑑賞】 自分を花の蜜を吸ふ蜂に喩へた所に、父を慕ふ情はよく出てゐる。

知る人にあはじくと花見かな 去 來

【句意】 隠者の花見である。知人に逢ふと、自分の清遊を妨げられるから、なるべく知人に逢ふまい逢ふまいとして、花を見歩いてゐるといふ意。

【鑑賞】 作者の閑寂を好む心持はよく出てゐる。

ある 僧の 嫌ひし 花の 都かな 九 兆

【語意】 或僧—玄賓僧都。道鏡の従兄。道鏡の内道場に立ち入るを慨し、大和の三輪に隠れ、後備中の湯川寺に潜んだ。弘仁九年寂。大鏡に、成美曰、「江談抄に玄賓僧都を辭する時、遠つ國は山水きよしことおほき君が都は住まざるまされり。」とある。

【句意】 昔物語によると、玄賓僧都といふ人は、この賑かな花の都を捨て、遠い山の中に隠れて了つたさうだが、をかしな坊さんもあつたものだといふ意。

【鑑賞】 玄賓僧都を冷笑したやうな句で、俳人の人生觀と思へば面白い所もある。或僧と言つてわざと玄賓の名を隠した所が上品である。

浪人のやどにて

鼠 共 春の 夜 あれそ 花 鞆 半 殘

【語意】 花鞆—花をさした鞆。鞆は矢を入れる道具。腰に附ける。普通毛皮の尻鞆が附く。

【句意】 鼠達よ。春の夜を荒れてくれるな。今は祿を離れた浪人ではあるが、昔は武士である。武士の大切な品である鞆をお前に喰はれては大變だ。而もその武士は風流な侍である。鞆に花を挿してゐるぞといふやうな意。

【鑑賞】 前書が浪人の宿とあるから、作者の友人であらう。友人の佗住居をいたはり、且つその風流な心にめでて、鼠に言ひかけたのである。俳諧氣分の出てる句だ。

腥 きはな 最 中の ゆふべ 哉 伊賀 長 眉

【句意】 花見客の食ひ荒した酒肴が、花の下に取散つてゐる夕暮の状であらう。

【鑑賞】 花の夕は一層淋しさを感ぜしめるもので、観念的になりたがる。此の場合も靜に咲き満ちた夕暮の花下に立つて、花見客の淺間しさを深く感じたのである。

はなも奥有りとや。よしのに深く吟じ入りて

大峰 や よ し の 、 奥 の 花 の 果 曾 良

【語意】 花も奥あり云々—大峰は吉野の奥にある。大峰—大和十津川の里の東に在る連山。昔は山伏の修行地で、順の峰入（熊野から入つて吉野に出る。三月）、逆の峰入（吉野から入つて熊野に出る。七月）の名がある。前書文意、吉野の花も奥があると見える。吉野に深く吟じ入つて。

【句意】 吉野に深く入つて行くと、どこ迄もく／＼花が咲き續いて、大峰の方まで花が咲い

てゐるといふ意。

【鑑賞】 吉野の花の幽邃である事を深く感じた句である。どこことなく神韻縹渺とした趣がある。

道灌山にのぼる

道 灌 や 花 は そ の 代 を 嵐 哉 嵐 蘭

【語意】 道灌山—上野の北、日暮里の丘。太田持資の城址があつたと傳へられ、道灌山と呼ばれた。一説に、關道閑といふ人の屋敷があつたので、道閑山と言はれたのを、太田道灌に附會して、道灌山と言はれるやうになつたと。

【句意】 道灌山に登ると、櫻の花がちら／＼と散つてゐた。道灌は上杉定正の臣、鎌倉で殺された人、櫻はその代をはかなむやうに散つてゐるといふ意。

【鑑賞】 平凡な句である。

源氏の繪を見て

欄干に夜ちるの花の立ちすがたへは羽紅

【語意】 源氏の繪―源氏物語、須磨の卷、中納言の君と別れる時の繪であらうか。同卷に

「明けぬれば夜深う出で給ふに、有明の月いとをかしう、花の木どもやうく盛過ぎて、僅なる蔭のいとおもしろきに、庭にうすく暗がりて……隅のまの勾欄におしかりて、とばかり眺め給ふ。云々」とある。

【句意】 てすりにもたれて、花のやうな人が立つてみると、夜の花片がハラ／＼散りかゝるといふ意。

【鑑賞】 色彩感覺の強く出たといふだけの句。

庚午の歳家を焼きて

焼けにけりされども花はちりすまし 加 北 枝

【語意】 庚午の歳―元祿三年、北枝が火事に逢つたのは三月十六日である。其時庭の櫻も焼けて了つた。芭蕉が四月二十四日の日附で、見舞状をやつたものに、「焼けにけりの御秀作、かゝる時にのぞみ大丈夫感心、去來・丈草も御作驚き申すばかりに御座候。名歌を命にかへたる古人も候へば、かゝる名句に御替へ被成候へば、さのみ惜しかるまじくと存候。云々」とある。散りすまし―散り濟せた。

【句意】 家は焼けて、遺愛の櫻は亡くなつて了つたが、私はもう十分花を見盡した後だから（花は散り終つた）、更に思ひ残す事はないといふ意。

【鑑賞】 家は焼けても、花鳥風月の樂は忘れないといふ氣持を、芭蕉は賞めたのだらうが

かゝる生活態度はわるくすると後人を誤らせる事にならう。家を焼かれて困らぬ者はあるまい。困ればその前後策に没頭しないではゐられない。詩は現実生活の動搖から生れるもので、現実生活を度外視して、悟りすましたやうな境地からは、月並が生れるばかりである。御用心。

はなちるや伽藍の樞おとし行く 九 兆

【語意】 伽藍—寺。樞—戸から敷居に落してさす棧。

【句意】 境内の櫻は散りかゝつてゐる。日暮になつたので、小僧が縁側の戸に棧を下して歩き廻る状である。

【鑑賞】 花散るやで、一層寺の境内の夕暮の淋しさを印象化してゐる。

海棠のはなは満ちたり夜の月 江戸 普 船

【語意】 海棠—薔薇科の木。花は紅く、艶美で、海棠の雨に惱むなどと、病める美人の顔に喩へられた。

【句意】 一杯に咲いた海棠の上に、春の月がさしてゐる状。

【鑑賞】 花は満ちたりが印象的でよい。海棠の艶麗な花に月のさしてゐる状は、繪に描いたやうに美しい。

大和行脚のとき

草臥れて宿かる頃や藤の花 芭蕉

【語意】 大和行脚—貞享五年芳野行脚。泊船集に、「大和行脚の時に、たむば市とかやいふ處にて、日の暮れかゝりけるを、藤の花覺束なく咲きこぼれけるを」と前書する。

【句意】脊には荷物を擔いでゐるし、足は勞れる。進まうとしても、後へ引かれる思で、やつと日暮に丹波市へ入つた。今夜はいゝ宿を取りたいものだと思へながら、フト見ると道端に藤の花が咲いてゐたといふ意。

【鑑賞】勞れ足を引きずつて、宿場へたどり着いた日暮に、藤の花を見た心持は、暗く侘しいものであつたらうと思ふ。覺束なく咲きこぼれた藤は、決して旅人の心を引立てるものではあるまい。旅情と言へば旅情だが、それは藤の花のやうな暗い心であつた。

山鳥や 躑躅よけ行く 尾のひねり 探丸

【語意】山鳥―雉子に似て大きく、雄は全身赤黄色、赤黒の斑があつて尾が長い。雌は黒色でやゝ赤く、尾が短い。

【句意】庭につゝじが満開で、その間を山鳥が長い尾をひねりながら、つゝじを除けて歩いてゐる。

【鑑賞】艶麗な色彩感覺を表した句。山鳥とつゝじの色の配合で、尾のひねりが印象的である。

やまつゝじ海に見よとや 夕日影 智月

【句意】海邊につゝじ山があつて、そのつゝじに夕日が眞赤に落ちてゐる。そのつゝじの色が海に映つて海上を染めてゐる。夕日よ。お前は私に山つゝじを海に見よと言つて照らしてゐるのかといふ意。

【鑑賞】海に見よが少し技巧的であるかと思ふ。特別な場合で、作者も特殊な感動を持つたのだらうが、そこが奇警過ぎるやうに思ふ。

兎角して 卯の花つぼむ 彌生哉 山川

【句意】 雪のやうな卯の花を、早く見たいものだど待つてゐるが、なかなか咲きさうもない。やつと三月も半過ぎて苔を見せる事になつた。これなら咲くに間もあるまいといふ意。

【鑑賞】 卯の花の期待感情に、月日の變化をかけ合せて、卯の花を賞美する心を出さうとしたのだらう。

鶯の聲きよそめてより山路かな 伊賀式之

【語意】 鶯—雀に似て形大、嘴短く、頭深黒、頭のあたり深紅。山林に棲み、鳴く聲圓滑にして短い。

【句意】 鶯は形うるはしく、聲艶であるから、俗に宇曾姫と言はれた鳥である。山中を行く時、急に此の鳥の美聲を聞き付けて、足も軽く、朗になつて、春の山路が好もしくなつたといふ意。

【鑑賞】 山路行く旅人の眞情であらう。聞きそめいよりが面白い。繊細な感の句だ。

木曾塚

其春の石ともならず木曾の馬 乙 効

【語意】 木曾塚—栗津の義仲寺の境内にある木曾義仲の墓。その傍に芭蕉の無名庵があつた。石ともならず—杜甫の玉華宮の懷古に、「美人好黄土、況乃粉黛假、當時侍金輿、故物獨石馬」とある。石馬は支那では墓の傍に立てる。我國社頭の高麗犬のやうな類である。木曾の馬—所謂木曾の鬼蘆毛といふ名馬であらう。

【句意】 義仲の馬は主人の死を悲んで、義仲の討死した日（元暦元年正月二十日栗津で討死する）に石と化つて、墓の傍に立ちさうなものだが、石ともならないのは、如何にも恩を知らない馬であるといふ意。古來名馬が主人の死を悲んで死んだものに、梶原の生食・

項羽の烏騷・關羽の赤兎などがあつた。蓼太考に、「源頼朝卿生食といふ良馬を佐々木高綱に賜ふ。嘗於阿州勝浦斃。化爲石。土俗呼曰石馬。後太平記に見ゆ。項羽が烏騷、關羽が赤兎、皆慕うて死す。是等を思ひ寄せて作したる也。」とある。

【鑑賞】 作者は先づ木曾の馬から和漢の名馬の死後を連想し、次で支那の石馬の故事に思ひ及び、境内に一基の石馬もなく、英雄の死の淋しき事を懐古したものであらう。旅寐論に、讚や名所の句は、その場が分るやうに作る事が肝要であると言つて、「乙州木曾塚の句は、勝れたる句にあらずといへども、爰をゆるして、猿蓑集に入るべきよし下知したまふ。云々」とあるから、此の句は善くはないが、木曾塚の實況をよく表してゐるので入れたものと見える。即ち木曾塚は誰も訪れるものなく、幾百星霜風雨にさらされてゐる哀な有様を示した所がよいのであつた。

春の夜はたれか初瀬の堂籠 曾良

【語意】 初瀬—泊瀬・長谷とも書く。大和磯城郡にある寺。長谷寺。堂籠—御寺にお籠りする事。三月三日から十一日迄。長谷寺に千部經會を行ふ。

【句意】 春の夜、なまめかしい春の夜に、初瀬の御寺にお籠りする人は、誰であらうといふ意。

【鑑賞】 懐古的な空想的な句で、それが春の夜に對して、言ひ知れぬなつかしさを持つてゐる。初瀬参りは中古以來隨分行はれた事で、源氏の玉葛たまかつらなど殊に艶な話柄として傳へられる。此の句はかゝる古き御寺に參籠する人の、なつかしき思出に誘はれて成つたもので、そこがよいのである。

望湖水惜春

行春を近江の人とをしみける 芭蕉

【語意】望湖水云々―此の句を作つた場所に就て、古來二説がある。一は蓼太説で、「翁石山寺の奥幻住庵に在せる頃、その門人等と春を惜しめる湖水の眺望也。(句解)、他は支考説で、それを素丸が支持したもの、「行春の一章は、彼の木曾寺の偶作にて、云々」(古今抄)、「幻住庵にての吟といへるは甚だ龕案也。木曾塚の庵にての吟に疑なし。……石山奥の幻住庵は、紫式部が源氏書きたりし所よりは、遙に一里も其餘も山奥の在にありて、湖水の見ゆる所にあらざる由、陶雅申しき。……木曾寺は湖水前にたゞへて、その頃は市店も稀なれば、湖水を見渡しながらの吟疑なし。云々」(説叢大全)などある。芭蕉が幻住庵に入つたのは、元祿三年四月であつたから、行春の句を幻住庵で作るのも變である。尤幻住庵から湖水が見えないといふのは疑はしい。幻住庵の記に、「身は瀟湘・洞庭に立つ。云々」とあるから、見えたのであらう。木曾寺の庵は無名庵の事で、こゝへ入つたのは元祿三年九月であつたが、四年三月の末頃、大津の尙白へ遊んでゐるから、その頃無名庵へ来て、門人等と春の名残を惜んだのであらうが確證が無い。併し行春の句は諸註大方木曾寺の吟に定めてゐる。

【句意】近江は古來名所・舊跡の多い地として知られ、詩歌にもその佳景しばしば傳へられてゐる。私は過ぎ行く春の名残を、さういふ名勝に富んだ近江の人々と惜んだのは感慨が深いといふ意だらう。

【鑑賞】門人と言はず、近江の人と言つた所が面白いし、惜し、み、け、ると連體形で止めて、余情を残した表現もうまい。去來抄に、「先師曰、尙白が難に、近江は丹波にも、行春は行年にもなるべしといへり。汝いかゞ聞き侍るや。去來曰、尙白が難あたらす。湖水朦朧として春を惜しむに便あるべし。殊に今日の上に侍ると申しき。先師曰、然り。古人も此國に春を愛する事をさく都に劣らず。去來此一言心に徹す。行年、近江に居給はゞ、いかでか此感のましますさん。行春、丹波にゐまさば、もとより此情浮かぶまじ。風光の人を感動せしむる事、眞なるかなと申す。先師曰、汝や去來、共に風雅を語るべきものなりと喜び給へりしかと。」ある。芭蕉得意の句と見えるが尤である。尙白などには芭蕉の深い心持は分るまい。

表紙背の符號	1	2	2.5	3	4	4.5	5	5.5	6	7	8
定價(錢)	二〇	三〇	三五	四〇	四五	五〇	五五	六〇	七〇	八〇	九〇
内地送料(錢)	三	六	六	六	六	九	九	九	一〇	一〇	一〇
外地送料(錢)	三	六	六	六	九	九	九	九	一三	一三	一三

□此の文庫は、内容厳選と最低の廉價とを以て第一義とし、専ら大衆普及を目的として刊行す。

□此の文庫に收容するものは、東西古今百般の書に亘り、校訂、註釋、翻譯、總て典據たるべきを期す。

□此の文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歴史、文學、藝術、美術等百般に及ぶ。

□表紙意匠中、1は十錢を、2は二十錢を、5は二十五錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ。

□定價及び送料左の如し。

昭和十六年十二月廿二日 印刷
昭和十六年十二月廿五日 發行

改造文庫 第二部 第三百六十一篇
猿 叢 集(前編)

定價 七拾錢

版權者 萩原蘿月
發行者 山本三生
印刷者 森島金治郎
東京市芝區新橋七丁目十二番地
東京市麻布區宮村町七十八番地

發兌 改造社
東京市芝區新橋七丁目十二番地
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)自一一二四番

配給元 日本出版配給株式會社
東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版文化協會會員 第一〇六〇六七號 (東京府規格外許可 第四三八號)

(所刷印島森 堂友兩)

(長谷部製本)

改造文庫分類目録

政治・經濟・法律・社會	國富論(上卷) アダム・スミス著 竹内謙二譯 8	國富論(中卷) アダム・スミス著 竹内謙二譯 6	國富論(下卷) アダム・スミス著 竹内謙二譯 6	人口論(上卷) ロバート・マルサス著 松本信夫譯 5	人口論(中卷) ロバート・マルサス著 松本信夫譯 5	人口論(下ノ一) ロバート・マルサス著 松本信夫譯 5	人口論(下ノ二) ロバート・マルサス著 松本信夫譯 4	マルサス穀物條約論 鈴木鴻一郎譯 3	日本經濟論 田口卯吉著 1	日本經濟學說の要領 瀧本誠一著 2	日本商業史 横井時冬著 4	日本工業史 横井時冬著 4	日本社會史 本庄榮治郎著 4	封建社會の研究 本庄榮治郎著 2
我近世の農村問題 本庄榮治郎著 3	世事見聞録 武陽隱士著 4	社會フアシズム論 ラベンスキイ著 田中勝太郎譯 2	婚姻と離婚 ウェスターマルク著 青山實夫譯 3	三民主義 金井寛三譯 3	三民主義續篇 金井寛三譯 4	財産起源論 レヴィンスキイ著 貴島克己譯 1	經濟學の實際知識 高橋龜吉著 2	財政概論 田中次郎譯 4	プレブス經濟學 田所輝明譯 3	經濟地理概論 菊川忠雄譯 3	英國勞働運動史 稲岡選譯 3	原始財産 長野銀一郎譯 6	全金融資本論 林ヒルファディング著 要譯 7	獨逸社會史(四) 塚本三吉譯 7
帝國主義論 ホブソン著 石深新二譯 5	垂統秘録・混同秘策 佐藤信淵著 伊豆公夫譯 3	工業分布論 江アルフレド・ウエーバー著 阿野季房譯 4	通貨調節論(上) J. フラートン著 阿野季房譯 5	通貨調節論(下) J. フラートン著 阿野季房譯 5	宗教・哲學・教育・歴史・地理 自然科學・美術・音樂	宗教及び信仰の起源 五ハインリッヒ・クノール著 城登譯 3	エミール(上卷) ルイ・ジヤコフ著 内山賢次譯 4	エミール(下卷) ルイ・ジヤコフ著 内山賢次譯 4	リッケルト論文集 リッケルト著 2	唯一者とその所有 辻マックス・ステイホルツ著 調譯 6	心理學概論 プレブス・リッゲ編 小宮義孝譯 3	改哲學概説 桑木嚴著 5		

現代哲學思潮 桑木嚴著 5	キリスト教の本質 桑田悟郎譯 5	カントの平和論 朝永三十郎著 2	天才論 ロンブローゾ著 調譯 5	ドイツ古典學 栗原高沖共譯 3	哲學の進歩 栗原高沖共譯 3	法律哲學綱要(上) ヘーゲル著 田村實譯 5	法律哲學綱要(下) ヘーゲル著 田村實譯 6	ヘーゲル哲學綱要(上) 田村實譯 6	ヘーゲル哲學綱要(下) 田村實譯 6	ドイツ史 フランツ・メリンゲン著 佐藤 5	民族移動史 ハッドン著 小山栄三譯 2	人類文化史(上) ヴァン・デル・リッペン著 神近市子譯 5	人類文化史(下) ヴァン・デル・リッペン著 神近市子譯 5	日本美術(上卷) 中村亮平著 5	日本美術(下卷) 中村亮平著 6	泰西美術の知識 中村亮平著 6	東洋美術(上卷) 中村亮平著 6
東洋美術(下卷) 中村亮平著 5	岡倉天心傳 清見陸郎著 5	妾の半生涯 田英子著 4	建築と繪畫 内田佐久郎譯 5	藝術とは何ぞや 木村毅譯 3	人生論 トルストイ著 泉譯 4	ニヒチエ論抄(一) 井汲越次譯 3	ニヒチエ論抄(二) 井汲越次譯 4	ギョオテ傳 島外著 7	トオマス・マン自傳 野修譯 2	ボオドレエル傳 シェンベルグ共譯 5	ニーチエ傳(上) 野上 巖譯 4	ニーチエ傳(中) 野上 巖譯 4	スピノザ 豊川昇譯 4	歐洲文學發達史 外村史郎譯 6	蟻の生活 園信一譯 3	性と性格(上) 村上啓夫譯 4・5	
性と性格(下) 村上啓夫譯 4・5	文化と風土 丸山武次著 6	この人を見よ 小栗孝則譯 4	誘惑者の日記 神保光太郎譯 5	日本開化小史 田口卯吉著 2	老子の研究(上) 序説 武内義雄著 5	老子の研究(下) 道徳 武内義雄著 4	人間の美的教養 武内義雄著 4	教養の探求 大ニホルスト・デイムホフ著 勝譯 3	自然界におけるトマス・ハックスリ著 藤譯 4	精神科學の論理 J. S. ミル著 松浦孝作譯 5	科學概論 内山賢次譯 5	朝鮮慶州の美術 中村亮平著 6	國文學	古事記傳(一) 本居宣長著 6	古事記傳(二) 本居宣長著 6		

新萬葉集略解(一)	藤千 藤吉 校註	6
作者別萬葉全集	土岐善賢編著	6
作者別萬葉以後	土岐善賢編著	6
現代源氏物語(一)	窪田空穂譯	5
現代源氏物語(二)	窪田空穂譯	5
現代源氏物語(三)	窪田空穂譯	5
現代源氏物語(四)	窪田空穂譯	5
平家物語(上卷)	吉澤義則校訂	4
平家物語(下卷)	吉澤義則校訂	5
大鏡	吉澤義則校訂	5
徒然草	吉澤義則校訂	3
拾遺愚草(一)	藤原定家著 藤原定家註	5
拾遺愚草(二)	藤原定家著 藤原定家註	5
新古今和歌集	吉澤義則校訂	5
金槐和歌集	中田良平校訂	4
新神皇正統記	宮地直一校註	6
宇治拾遺物語(上)	中島悅次校註	6

宇治拾遺物語(下)	中島悅次校註	6
大和物語	水野駒雄校註	4
伊勢物語	久松澄一校註	2
雨月物語	山口剛校訂	2
國歌八論	土岐善賢編著	3
平賀元義歌集	植松壽樹・野田實 中田良平 編註	6
好色一代男	神谷鶴伴註釋	5
折たく柴の記	伊豆公夫校註	6
草雙紙	尾崎久彌編	5
芭蕉書簡集	萩原蘿月校訂	3
多の日	全釋俳諧(一) 萩原蘿月著	3
蕪村七部集	萩原蘿月校訂	3
俳諧七部集	萩原蘿月校訂	3
俳諧續七部集	宇田久校註	3
其角七部集	宇田久校註	3

頭其角俳句集	萩原蘿月校註	5
芭蕉遺語集	萩原井泉水校訂	3
茶七番日記(上卷)	萩原井泉水校訂	4
茶七番日記(下卷)	萩原井泉水校訂	4
大經師昔曆	樋口慶千代評註	2
重井	樋口慶千代評註	2
萬葉漫筆	佐佐木信綱著	6
東遊	橘南忠義校註	5
西遊	橘南忠義校註	5
世間胸算用	井原西鶴著 守隨憲治校註	3
日本永代藏	井原西鶴著 守隨憲治校註	3
現代日本文學	(小説・戯曲・評論・詩・短歌・俳句・隨筆・紀行)	4
みだれ箱	藤澤雨隠	4
うた日記	嶋外著	3

澁江抽齋	嶋外著	6
北條霞亭(上)	嶋外著	5
北條霞亭(下)	嶋外著	5
瀧口入道	高山樗牛著	2
樋口一葉選集	樋口一葉著	1
樋口一葉選集(第二)	樋口一葉著	5
北村透谷選集	島崎藤村著	1
山陰土産その他	島崎藤村著	2
海へ	島崎藤村著	5
三人	島崎藤村著	3
出	島崎藤村著	4
藤村隨筆(上)	島崎藤村著	3
藤村隨筆(下)	島崎藤村著	5
平	凡三葉亭主人著	1
子規俳話	正岡子規著	3
子規歌論	寒川陽光編	3
坊つちやん	夏目漱石著	2

草	枕目漱石著	2
それから	夏目漱石著	3
一握の砂・悲しき玩具	石川啄木著	2
我等の天才である	石川啄木著	1
短歌	集 石川啄木著	4
詩	集 石川啄木著	5
小説集(上)	石川啄木著	6
小説集(下)	石川啄木著	5
評論感想集(上)	石川啄木著	4
評論感想集(下)	石川啄木著	4
書簡集(上)	石川啄木著	5
書簡集(下)	石川啄木著	4
白秋民謡集	北原白秋著	2
白秋童謡集	北原白秋著	2
白秋國民歌集	北原白秋著	2
白秋舞踊詞集	北原白秋著	2
明治大正時史概観	北原白秋著	4

厭世家の誕生日	佐藤春夫著	1
田園の憂鬱	佐藤春夫著	4
お絹とその兄弟	(他六) 佐藤春夫著	5
海上	海横光利一著	5
日	輪横光利一著	1
労働者の居ない船	山崎樹樹著	1
海に生くる人々	山崎樹樹著	2
はやり	唄小杉天外著	3
朝の螢	齋藤茂吉著	2
十	年島木赤彦著	2
川のほとり	古泉千樞著	2
松の芽	中村憲吉著	2
海やまのあひだ	釋迢 著	4
立	春木下利文著	2
花	櫻 北原白秋著	3
人間往来	與謝野晶子著	2
楓の木	窪田空穂著	2

自選	野原の郭公	若山牧水著	2
自選	原生	林前田夕暮著	3
自選	空を仰ぐ	土岐善磨著	1
自選	新選秀歌百首	齋藤茂吉著	3
鶯の	卯	土岐善磨著	3
啄木追	懷	土岐善磨著	6
信綱文集	集	佐佐木信綱著	2
愛すればこそ	谷崎潤一郎著	3	
愛なき人々	谷崎潤一郎著	3	
屋上の	土古泉千樞著	5	
青牛	集	古泉千樞著	5
みだれ髪・小扇・纏衣	與謝野晶子著	3	
句集	虚	子高瀨虚子著	6
井泉水句集	萩原井泉水著	5	
性に眼覚める頃	室生犀星著	4	
室生犀星詩集	室生犀星著	5	
千家元鷹詩集	千家元鷹著	3	
横瀬夜雨詩集	横瀬夜雨著	5	
修禪寺物語	岡本綺堂著	3	
少年の悲哀	國木田獨步著	2	
運命論	者國木田獨步著	2	
武藏	野國木田獨步著	5	
愛	武蔵小路實篤著	2	
父と娘	(他四篇) 武蔵小路實篤著	4	
わしも知	(他十篇) 武蔵小路實篤著	4	
人生雜感	(感想) 武蔵小路實篤著	4	
日本	橋泉 鏡 花著	5	
無名作家	(他廿篇) 短篇小説集 1) 菊池寛著	5	
日記	三篇(現代物) 2) 菊池寛著	4	
出世	他廿篇(短篇小説) 菊池寛著	5	
風響の	他廿篇(集時代物) 菊池寛著	5	
彼方に	八篇(集時代物) 菊池寛著	4	
噂の發生	他廿篇(集補遺) 菊池寛著	5	
父歸る	他廿篇(戯曲篇) 菊池寛著	5	
藤十郎の戀	他十篇(戯曲篇) 菊池寛著	6	
眞珠夫人	人菊池寛著	6	
慈悲心	鳥菊池寛著	4	
新	珠菊池寛著	5	
火	華菊池寛著	4	
受	華菊池寛著	5	
赤い	鳥菊池寛著	3	
明	禍菊池寛著	5	
新	女性 鑑菊池寛著	3	
陸	の 人 魚菊池寛著	4	
第二の	接吻菊池寛著	3	
東京行	進曲菊池寛著	3	
結婚	二重奏菊池寛著	3	
不壊の	白珠菊池寛著	3	
今	戸心 中廣津柳浪著	3	
嬰兒	殺し 山本有三著	3	
芭蕉・夜船・草の詩	吉田敏二著	3	
楠木正成	直木三十五著	7	

ドレフユース事件	大佛次郎著	3
天保赤門	黨土師清二著	5
血染の	パイプ 甲賀三郎著	4
苦の	世 界 宇野浩二著	3
山戀	ひ 宇野浩二著	4
藏の中	(他四篇) 宇野浩二著	5
矢島柳堂	志賀直哉著	2
焚	火 志賀直哉著	2
老	人 志賀直哉著	2
網走	まで 志賀直哉著	2
速夫の	妹 志賀直哉著	2
好人物の	夫婦 志賀直哉著	2
雪の	日 志賀直哉著	2
暗夜行路	(前篇) 志賀直哉著	3
多情佛心	(前篇) 里見 淳著	3
多情佛心	(後篇) 里見 淳著	3
青	年(上卷) 林 房 雄著	4
青	年(下卷) 林 房 雄著	4
自選	短篇集 林 房 雄著	7
斬るな	劍(他九篇) 白井露二著	5
大暴風雨	時代 前田河原一著	5
浅草	紅 團川端康成著	5
童	話 川端康成著	4
化粧と口笛	(他三篇) 川端康成著	5
悪	太 郎 尾崎士郎著	5
白き手	の人々 吉屋信子著	7
風	俗 石坂洋次郎著	4
喧嘩	鴉 籠 長谷川伸著	5
角兵衛	物語 長谷川伸著	5
唐人	お 吉 十一谷義三郎著	2
時	の 唐人 お 吉 十一谷義三郎著	4
敗者	唐 人 お 吉 十一谷義三郎著	4
笑ふ	男 笑 ぶ 女 十一谷義三郎著	5
或る	女(上卷) 有島武郎著	4
或る	女(下卷) 有島武郎著	3
星座	・ 生れ出る 惱み 有島武郎著	4
宣言	・ クララの 出家 有島武郎著	3
迷	路 有島武郎著	3
カインの	末裔・ 潮霧 有島武郎著	2
お末の	死・ かんかん 有島武郎著	2
旅	する 心 有島武郎著	2
石に	ひしがれた 雑草 有島武郎著	2
小	さき 有島武郎著	2
惜	みな 愛は 奪ふ 有島武郎著	2
有	島武郎 戯曲集 有島武郎著	4
有	島武郎 書簡集 有島武郎著	5
有	島武郎 日記集 有島武郎著	4
彌	太郎 笠子母澤 寛著	4
神	變 麝香猫(上卷) 吉川英 治著	4
神	變 麝香猫(下卷) 吉川英 治著	3
女	給 廣津和 郎著	5
收	水歌集(1) 若山 牧水著	4
收	水歌集(2) 若山 牧水著	4
收	水歌集(3) 若山 牧水著	4

牧水歌論歌話集	若山 牧水 著	6
短歌作	法留田 空穂 著	6
牧水紀行文集	若山 牧水 著	4
歌鏡	葉留田 空穂 著	4
貝殼追放(上卷)	水上 龍太郎 著	7
貝殼追放(下卷)	水上 龍太郎 著	7
葛西善藏小説集(卷一)	葛西 善藏 著	3
葛西善藏小説集(卷二)	葛西 善藏 著	4
葛西善藏小説集(卷三)	葛西 善藏 著	4
葛西善藏小説集(卷四)	葛西 善藏 著	4
葛西善藏小説集(卷五)	葛西 善藏 著	3
葛西善藏小説集(卷六)	葛西 善藏 著	3
葛西善藏感想集	葛西 善藏 著	5
頼朝・爲朝	幸田 露伴 著	3
蒲生氏郷	幸田 露伴 著	2
龍姿蛇姿	幸田 露伴 著	5
幽秘記	幸田 露伴 著	6
近代の戀愛觀	厨川 白村 著	3
象牙の塔を出て	厨川 白村 著	4
十字街頭を往く	厨川 白村 著	3
近代文學十講	厨川 白村 著	5
文藝評論集	小林 秀雄 著	3
石川啄木	金田 一京助 著	5
愛弟通信	國木 田獨步 著	4
支那游記	芥川 龍之介 著	4
機械	他八篇 横光 利一 著	4
増補 天地有情	土井 晩翠 著	5
訂正 俳諧師・續俳諧師	高濱 虚子 著	5
ふりだした雪(他四篇)	久保 田万太郎 著	5
南蠻更紗	新村 出 著	6
勝海舟	舟山 路愛山 著	5
外國文學	小説・戯曲・詩・隨筆・紀行・評論	
大號室・接吻	他八篇 梅 田 實 著	4-5
可愛い女(他十篇)	チエーホフ 著	5
チエーホフ書簡集	内山 賢次 著	5
チエーホフ傑作集	チエーホフ 著	4
寡婦マルク	エリセ・オルゼシニコフ 著	3
サニ	武 林 無想庵 著	6
一青年の告白	辻 野 龍一 著	3
一週	リベティンスキ 著	2
新巴里の憂鬱	ボドレール 著	3
母への手紙(上)	ボドレール 著	4
母への手紙(下)	ボドレール 著	4
母への手紙	祖 川 孝 著	3
ランボオの手紙	祖 川 孝 著	3
死の舞	山本 有三 著	2
佛蘭西童話集(第一)	ボームン 夫人 著	3
佛蘭西童話集(第二)	ドルノア 夫人 著	5
佛蘭西童話集(第三)	ヘンロー 著	3
佛蘭西童話集(第四)	ハルトン 他三人 著	6
佛蘭西童話集	長 松 英一 著	6
ホワイント	ワグネル 著	3

野性の呼聲	花 園 龜 定 著	3
奈落の人々	和氣 律次 郎 著	3
争闘	和氣 律次 郎 著	2
勝利と敗北	中山 省三 郎 著	3
肉體の悪魔	土井 小 牧 著	3
英詩選	釋 厨川 白村 著	4
平妖傳(上卷)	佐藤 春 夫 著	4
平妖傳(下卷)	佐藤 春 夫 著	3
イブセン全集(第一卷)	河野 義博 著	3
イブセン全集(第二卷)	長谷 部 孝 著	5
イブセン全集(第三卷)	河野 義博 著	5
イブセン全集(第四卷)	長谷 部 孝 著	5
イブセン全集(第五卷)	大 山 廣 光 著	5
聖書物語(舊約)	市 川 龍 著	3
聖書物語(新約)	市 川 龍 著	3
洋服箆	大 山 廣 光 著	2
洋服箆筒	大 山 廣 光 著	2
ブツデンプロ	吉 良 良 吉 著	4
ブツデンプロ(二)	吉 良 良 吉 著	4
ブツデンプロ(三)	吉 良 良 吉 著	4
新人國記	木 村 益一 著	4
機衣	八木 さわ子 著	3
わが毒舌	石 川 瀧 著	5
どつこいおいら	エリス トロト ラ 著	2
は生きてゐる	木 達 著	2
人波	久 一 郎 著	3
結婚の悲劇	久 一 郎 著	5
苦難の路(上)	久 一 郎 著	4
苦難の路(下)	久 一 郎 著	4
社會詩集	生 田 春 月 著	5
戀愛詩集	生 田 春 月 著	5
ルテツイア(第一)	土 井 義 信 著	5
ルテツイア(第二)	土 井 義 信 著	5
ルテツイア(第三)	土 井 義 信 著	5
回想・告白	土 井 義 信 著	4
詩惡	魔 藏 原 惟 人 著	3
現代	男 梅 田 實 著	5
五月の夜(短篇集)	磯 原 惟 人 著	3
すばらしい合	杉 本 良 吉 著	3
新我等の心	モウパッサン 著	4
新死の如く強し	モウパッサン 著	5
色ざんげ(他十篇)	モウパッサン 著	3
初雪(他九篇)	モウパッサン 著	3
モウパッサン戯曲集	平 野 威 馬 雄 著	4
ベルシヤ人の手紙	モウパッサン 著	4
小公子	パオネット 著	2
作家論	平 岡 秋 田 共 著	4
ドストエフスキー論	秋 田 共 著	5
背徳者	石 川 瀧 著	2
蕩兒歸る(他二篇)	石 川 瀧 著	2
蕩兒歸る	石 川 瀧 著	2
法王廢の拔穴	生 島 遼一 著	6
ホムブルグの公子	濱 野 修 著	5

シロツフエンシ	クライスト	野	修	6
ヘルマン戦争	クライスト	野	修	5
敵・子供	ハ住利	雄	修	6
間でもつた人々	ハ住利	雄	修	4
私の大學・番人	ハ住利	雄	修	6
日記の中から	ハ住利	雄	修	4
伊太利物語	ハ住利	雄	修	5
カッセル(他七)	ハ住利	雄	修	6
ブルイチヨフ	ハ住利	雄	修	3
回筆	ハ住利	雄	修	5
随筆	ハ住利	雄	修	4
不用人の一生	ハ住利	雄	修	6
憂鬱	ハ住利	雄	修	4
ミルゴロ	ハ住利	雄	修	4
幼年時代(上)	ハ住利	雄	修	4
幼年時代(下)	ハ住利	雄	修	6
新編シラー詩抄	ハ住利	雄	修	8
私は愛す	ハ住利	雄	修	6
潜水艇乗組員	ハ住利	雄	修	3
二つの魂・餘計物	ハ住利	雄	修	2
密航	ハ住利	雄	修	3
戦争と平和	ハ住利	雄	修	8
闘のカ・生ける屍	ハ住利	雄	修	4
ロビンソン物語	ハ住利	雄	修	4
父と子	ハ住利	雄	修	6
うき草(ルーヂン)	ハ住利	雄	修	4
チロルの谷間(他三)	ハ住利	雄	修	4
異性は招く	ハ住利	雄	修	3
とハイル博士	ハ住利	雄	修	2
小鳥を友として	ハ住利	雄	修	5
静かなドン(第一卷)	ハ住利	雄	修	4
静かなドン(第二卷)	ハ住利	雄	修	4
静かなドン(第三卷)	ハ住利	雄	修	6
人間嫌ひ・プスイシエ	ハ住利	雄	修	5
プチブルジョア(上)	ハ住利	雄	修	6
プチブルジョア(下)	ハ住利	雄	修	4
サランボオ(上)	ハ住利	雄	修	4.5
サランボオ(下)	ハ住利	雄	修	4
断鴻零雁記	ハ住利	雄	修	4
マルコ・ポーロ	ハ住利	雄	修	7
ライオン牧歌譜	ハ住利	雄	修	4
紅玉(他六篇)	ハ住利	雄	修	2.5
風物帖	ハ住利	雄	修	5
美しき青春(他四)	ハ住利	雄	修	4.5
ファビアン(上卷)	ハ住利	雄	修	4.5
ファビアン(下卷)	ハ住利	雄	修	3
阿片溺愛者の告白	ハ住利	雄	修	2
巴里の胃袋(上卷)	ハ住利	雄	修	5
巴里の胃袋(下卷)	ハ住利	雄	修	4

死の勝利(上卷)	原田次	5
カムチャツカ紀行	中垣虎児	5
ふるさと紀行	竹越和夫	5
藝術の限界其他	佐藤正彰	2
情熱	スチファン・ワイク	3
智慧の悲しみ	ハ住利	3
決闘(上)	梅田寛	5
決闘(下)	梅田寛	5
ピノチ	梅田寛	5
劇作法(上)	末吉寛	5
劇作法(下)	末吉寛	4
悪魔の酒(上)	エテア・ホフマン	5
悪魔の酒(下)	エテア・ホフマン	5
薄命の(上)	ハ住利	4
薄命の(中)	ハ住利	4
薄命の(下)	ハ住利	5
クハフリトの手記	谷崎精二	5
街の風景	エルマール・ライス	4
ジャイロ物語	アリス・ステイル	3
浪漫主義(上)	崔ビツ	6
浪漫主義(下)	崔ビツ	6
浪漫主義	崔ビツ	6
アメリカ文學史要	ヴァン・ドレン	3
近代文學の意味	J.M. マリ	4
文藝復興(他一篇)	J.A. シモン	5
不安の概念	伊藤郷一	6

730
430

最新刊書目

國文學全史	平安朝編(下)	藤岡作太郎著	6
新註萬葉集略解(三・四)	橋本健吉校註	四五六	5
現代語譯源氏物語第六冊	窪田空穂譯		5
蜻蛉日記(上・下)	勝俣久作校註	各	4
武家義理物語	井原西鶴著 守隨憲治校訂		3
猿蓑集前篇	全釋詳註 七部集二	萩原蘿月著	7
福翁百話・百餘話	福澤諭吉著		6
懷往事談	福地源一郎著		5
伊澤蘭軒(中)	森鷗外著		5
義時の最期	坪内逍遙著		4
修禪寺物語他三篇	岡本綺堂著		5
戦争と平和第三卷	セワストポリ戦記	梅田寛著	9
プーシキン詩抄	ガリヴァー旅行記	上田進著	5
ル・ガツケライアケ	ベートーヴェン	セザンヌ傳	5
ドイッ人の政治的	經濟的國民統一	天才と創造(創造の原理及び心理學)	7
ユーベル大哲學史	古代篇	意志と現識と前	3
ビートル號航海記	上卷	下卷	8
トリス	トリス	トリス	9
上田進著	上田進著	上田進著	5
町野靜雄著	町野靜雄著	町野靜雄著	4
中村正著	中村正著	中村正著	5
柿沼太郎著	柿沼太郎著	柿沼太郎著	4
近藤孝太郎著	近藤孝太郎著	近藤孝太郎著	5
正木一夫著	正木一夫著	正木一夫著	3
グレンベルグ著	グレンベルグ著	グレンベルグ著	7
香山光雄譯	香山光雄譯	香山光雄譯	4
シヨベンハウエル著	シヨベンハウエル著	シヨベンハウエル著	3
姉崎正治譯	姉崎正治譯	姉崎正治譯	4
内山賢次譯	内山賢次譯	内山賢次譯	8

